

2010
April

4 月

高校版
Volume

1

2 私を育てたあの時代、あの出会い

教師歴30年の自分の在り方はあの徹夜で決まった
山形県立新庄北高校最上校教頭◎森 政行

4 特集

高校教育の使命

——学びに向かう生徒を育てる

6 現状把握 生徒の実態と教師の意識

8 インタビュー 高校生の「学びへの意欲」を高める高大接続
独立行政法人大学入試センター 試験・研究副統括官◎荒井克弘10 現場からの
提言 生徒を「学び」へと向かわせるために岩手県立久慈高校副校長◎鈴木晃彦
愛知県立御津高校校長◎水野謙二
鹿児島県立川辺高校校長◎神田芳文

16 指導変革の軌跡

16 静岡県立伊東高校

成績層別指導◎生徒の意欲を刺激する成績層別の課題と補習で学力底上げを実現する

20 神奈川県・私立自修館中等教育学校

学校改革◎授業改革と振り返りシートで教師の意識が変わる

24 福井県立若狭東高校

自己肯定感の涵養◎心の内を引き出す「書かせる指導」で生徒の自信を高める

28 生きたデータの徹底活用

3年生1学期の「受験生への切り替え」と自立の一步となる志望校設定

32 未来をつくる大学の研究室

地域から世界へ広がる有害物質の汚染と影響を
環境化学で究明

愛媛大 沿岸環境科学研究センター 田辺信介研究室



36 30代教師の「転んでも起きる!」

「つまらない」と言われたあの日から、理想の授業への挑戦が始まった
茨城県立古河第三高校◎藤田一輝

リニューアル

38 新課程への助走

義務教育段階からの「学び直し」の課題と実践—算数・数学を中心として

新連載

42 大学選択 新たな視点

専門性を見直し意欲が高まる学部横断型プログラム

新連載

46 VIEW'S REPORT

府県の枠を超えて連携し「学校力」を高め合う
「4校進路指導情報交換連絡会」

52 VIEW'S SQUARE

本文中のプロフィールは
すべて取材時(2010年2月)のもので
本文中、敬称略。
本誌記載の記事、写真の無断複写、
複製および転載を禁じます。



25歳の時から15年間勤務した山形県立酒田東高校は、

私を英語科教師として育ててくれた学校です。同校に赴任しなければ、きっと私は今とは違った教師になっていたはずですが、

当時の酒田東高校の雰囲気は、一言で言えば自由。私は11歳上で既に赴任8年目だった渡部環一先生はじめ、力のある教師が各々のスタイルで指導していました。しかし、初めて進学校にやってきた若手の私にとっては、もちろん甘い世界ではありませんでした。

授業が始まってすぐ、ある先輩からテスト問題の作成と採点を依頼されました。私は「採点はいつまでですか？」と尋ねたところ、当然といった顔で「翌日です」。「270枚はあります」と思わず言うのと、「どうぞせ家にいたってやることないでしょ！」と笑われる始末。先輩曰く、「何日もたつてから答案を返しても、生徒の気持ちは冷めてしまっているので指導にながらない。だから必ず翌日には採点して返しなさい」。結局テスト当日は、部活動の後に徹

私を育てたあの時代、あの出会い

今、振り返る教師としての原点

教師歴30年の自分の在り方はあの徹夜で決まった

山形県立新庄北高校最上校教頭 森 政行 MORI MASAYUKI

人の成長は、一瞬の気付きから始まる自己研鑽の積み重ねだ。

そして気付きを誘発するのは出会いと、そこで与えられる言葉である。

初めての進学校勤務で試行錯誤を続けた若手時代から、

より一層生徒に合った指導の在り方を検証し、

それを校内で共有する旗振り役へと成長していった

山形県立新庄北高校最上校教頭の森政行先生。

教師として決して忘れられない気付きの日々を振り返る。

夜で採点しました。

これが地域の期待を担う高校か、と気付かされることは多々ありました。しかしその一方で、指導法などを先輩から細かく指示されることはありませんでした。大切なことさえ押さええたら、あとは若手といえども自分で考えなさい、というわけです。ただし、先輩たちと話をする

機会はとて多い学校でした。

はつきり言えば、とにかく飲み会が多かった。月2、3回は当たり前。もちろん飲めば必ず生徒の話です。そうして、渡部先生ら先輩の考えに学内外で触れるうちに、自分ももっと挑戦したくなりました。毎日1題の大学入試問題を解くことを自分に課しましたし、オールインゲ

リッシュの授業を行った時期もありました。ただ、今振り返ると、渡部先生たちに付いて行く

うと必死で、自分の知識をとにかく生徒にぶつけるような教え方でした。渡部先生とは最初の5年間だけ一緒にさせていたのですが、私の印



5年間だけ一緒にさせていたのですが、私の印

先輩教師の言葉

人を育てるのは言葉であることをもっと自覚していい

元・山形県立鶴岡北高校校長 WATANABE YOICHI 渡部環一



当時の酒田東高校は教科分掌などを超えて、教師が

自由にものを言えました。しかし、最初からそうだったわけではありません。私が赴任した当初は、「ペテランに黙って従うべき」という空気ででしたから。それが変わっていったのは、そんな中でも若手が物怖じせず、意見を言っていたから。風通しの良い職場は、若手が勇気を出して発言することでつくられるのだと実感したものです。だから、赴任直後から自分の考えをしっかりと述べる森先生の様子を見て、頼もしく感じました。しかし、ペテランの存在ももちろん大きい。若い人たちの中に教師としての土台をつくっていくのは、やはりペテランの言葉だと思えます。今回私は、森先生が「テストは翌日まで返却しなさい」という一言を



右より・まさゆき 英語科。宮城県の専門学校に2年間勤務した後、山形県へ。酒田東高校、山形県教育委員会、霞城学園高校、山形南高校などを経て、現在、新庄北高校最上校教頭。
左わたなべ・よういち 英語科。酒田東高校での13年間の勤務の後、酒田市教育委員会、山形北高校、酒田中央高校などを経て、2004年度から05年度まで鶴岡北高校校長を務める。

象はきつと、「必死でもがいて
いる若造」だったはずで
す。転機になったのは30代になっ
てすぐ、県の「普通科活性化事
業」の指定を受け取り組んだ英
文法の自主教材制作でした。酒
田東高校の生徒に合った効率的
な教材、教え方は何か、じつと
りと考える機会になりました。
またこの頃、高校入試の結果か
ら新入生の弱点を分析し、それ
を踏まえた年間課題を4月の時
点で生徒に配布し始めました。



無我夢中だった指導に自分
なりの戦略が
生まれ、3年
間の指導で「山場」がどの
間も分かるようになりました。
赴任10年目を迎えた頃、教師
の入れ替えが進み、酒田東高校
の職員室は一気に若返りまし
た。指導ノウハウの継承・共有
の必要性を感じた私は、学年団
で外部模試の平均点予想会を企
画しました。該当教科の若い教

師が問題を解き、翌日までに校
内・全国平均点を予想し、点数
が最も外れた教師が飲み会を主
催するというものです。模試の
結果を待たずに指導の手立てを
いち早く考えるための方策でし
たが、教師の教科指導力を高め
るのに最適の場になったと思
います。ちなみに私は一度も主催
側になつたことはありません。
酒がからむと強いんです。
赴任した当時の酒田東高校は
教師個々の力で勝負していま

ただ、15年たつても変わらな
いものもありました。それは、
目の前の生徒を何とかしたいと
いう熱意です。地方公立高校の
生徒の志はまさに多様ですが、
それでも全員の志望をかなえよ
うと、教師は日々努力していま
した。だから、渡部先生たちは
皆、夜遅くまで働いていたし、
私も徹夜してでも翌日までに採
点しなければならぬという気
持ちになつたのだと思います。
確かに多忙な15年間でした。

ずっと忘れず
にいたことを
知り、感動し
ました。彼は
なぜそうすることが必要かを考
え、指導の本質までたどりつき、
それを自分の成長の指針としま
した。先輩の言葉をきちんと受
け止めた森先生も素晴らしいけ
れど、後輩と向き合つてやるべ
きことをしっかりと伝えた先輩
の存在も見逃せません。現場の
教師は、お互いの言葉、働き掛
けが人を育てるきっかけになっ
ていくということをもっと意識
すべきではないでしょうか。考
えてみれば、それは生徒との関
係でも同じなものですから。
それにしても、あの頃の酒田
東高校は飲み会が多かった。も
ちろん、飲んだからといって良
い学校になるわけではありません
が、日々の指導をざつぱら
んに語り合えたのは事実です。
教科、学年、分掌といろいろな
集まりがありました。森先生は
「独身会」に入っていましたね。
私が入っていたのは「惨め会」。
いつも夜遅くまで仕事している
連中とこっそりと結成していま
した。生徒が学校にいる間は机
に座って仕事は出来ません。教
材研究などが出来るのは、生徒
が帰ってから。夜中まで働くこ
とを惨めと自嘲しながら、その
ことに誇りを持っていたことは
言うまでもありません。

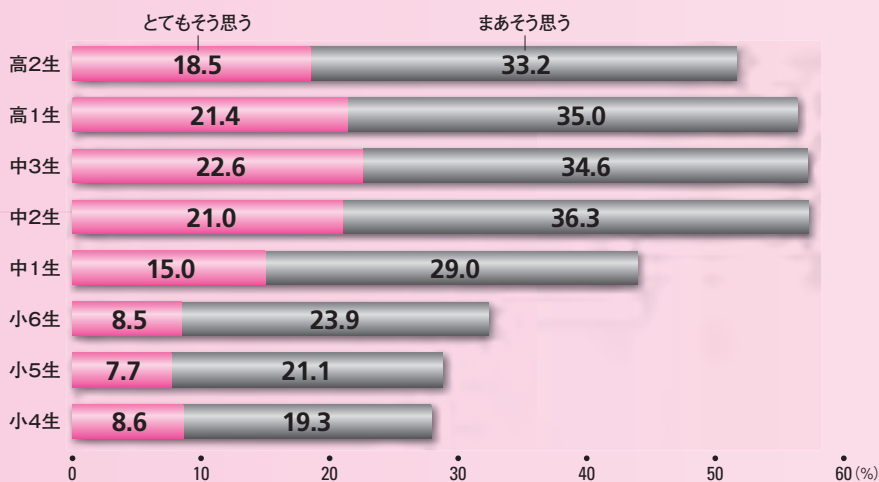


高校教育の 使命

学びに向かう生徒を育てる

学びに向かう生徒を育てることは、学校教育の不易の課題だ。
教育環境が変化する中で、高校教育がこの課題に取り組むため、何をすべきかを考える。

Q. 「どうしてこんなことを勉強しなければいけないのかと思う」



Benesse教育研究開発センター「第2回子ども生活実態基本調査」(2009年)

中高生の約半数が、なぜ勉強しなければならないのかと疑問に思い、「学び」を否定的にとらえている。
特に、中2生、中3生、高1生の数値が高い。

1

「学習意欲の低下」が課題

【 P.6 現状把握 】

生徒の実態

- ◎家庭学習時間は2004年に比べて中堅校で増え、改善の兆し。ただし、進学校の学習時間は減少。
- ◎「将来、なりたい職業」がある子どもが、全体的に減少。

高校教師の意識と期待

- ◎指導上、大きな課題の1つは、「生徒の学習意欲の低下や生徒間の学習意欲の格差」。
- ◎「学び」を軸にした高大連携や、大学教育の中身の充実への期待が大きい。

2

生徒が学びに向かう「高大接続」とは何か

【 P.8 インタビュー 】

独立行政法人大学入試センター 試験・研究副統括官

荒井克弘



- ◎大学入試以外の手段で、学習意欲を高める方法が必要

- ◎各校が自校の使命を明確にし、その多様性を生かす制度設計が必要

- ◎公立高校の授業料が無償化（私立高校への就学支援）される中、教育の質を保障し、教育にかかるコストを無駄にしないための抜本的な見直しが必要

3

生徒のために高校教育が果たすべき使命

【 P.10 現場からの提言 】

岩手県立久慈高校副校長

鈴木晃彦

愛知県立御津高校校長

水野謙二

鹿児島県立川辺高校校長

神田芳文

高校が抱える課題は何か

- ◎「挑戦したくなる」仕掛けを用意しているか
- ◎自信を持たない生徒を「是認」していないか
- ◎「学びの感動」を与える授業が出来ているか

生徒とどう向き合うか

- ◎目先の評価ではなく、「1年先の感動」を見通した指導
- ◎自信を持たない生徒に夢を持たせる
- ◎生徒の未来に対して責任を担う

学校、教師はどう変わることが出来るか

- ◎「自信を持たせる指導」が分断されず、連続して存在することが大切
- ◎質の高い授業が出来れば、進路指導も生活指導もうまくいく
- ◎先を見通した仕事で、生徒と向き合う時間を生み出す

現状把握

高校生の学び、職業意識の実態

進学校での 平日の家庭学習時間が減少

ベネッセ教育研究開発センターの調査によると、高校生の平日の家庭学習時間は2004年と09年とでは変わらない。ただし、高校の偏差値別（*1）に見ると、中堅校と進路多様校では増え、進学校では減っている（図1）。また、進学校の成績中下位層は、中堅校の成績上位層と比べて学習時間が少ない。

部活動と家庭学習時間との関連を見ると、部活動加入の生徒の方が、部活動を途中でやめた生徒よりも平均学習時間が多い（図2）。

「なりたい職業があるか」と尋ねたところ、04年調査と比べて「ある」と答えた子どもは小中高とも、どの学年でも減った（図3）。特に、高校生の減少幅は大きい。

生徒の実態と教師の意識

生徒の学びに対する姿勢や教師の意識は、どのような状況にあるのか。高校教育の役割を考える前に、押さえておきたいポイントを整理した。

高校生の学び、職業意識の実態

図1 高校偏差値別・平日の家庭学習の平均時間（高1生、高2生合算）

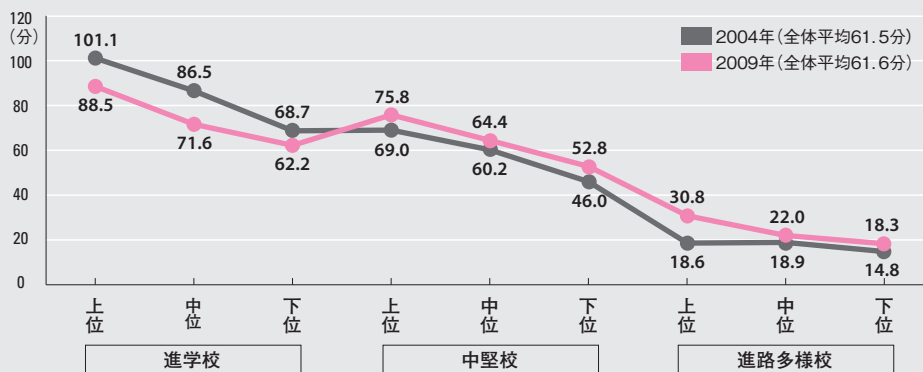


図2 部活動参加の有無と平日の家庭学習時間（高1生、高2生合算）

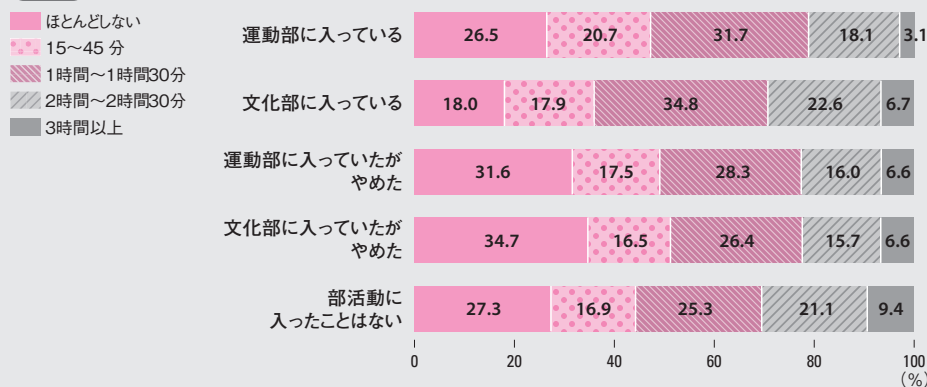


図3 「将来なりたい職業がある」と答えた割合

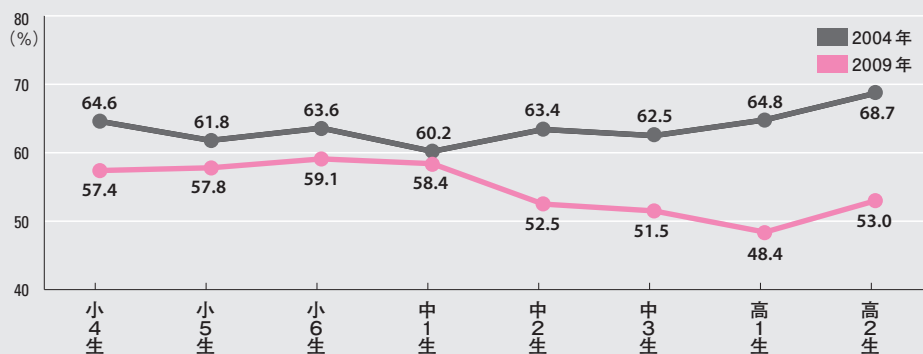


図1~3出典 / Benesse 教育研究開発センター「第2回子ども生活実態基本調査」(2009年)

*1 「進学校」は進研模試偏差値が60以上、「中堅校」は偏差値50~59、「進路多様校」は偏差値50未満をそれぞれ目安とする

高校教師の意識

「学び」を軸にした 高大連携に期待

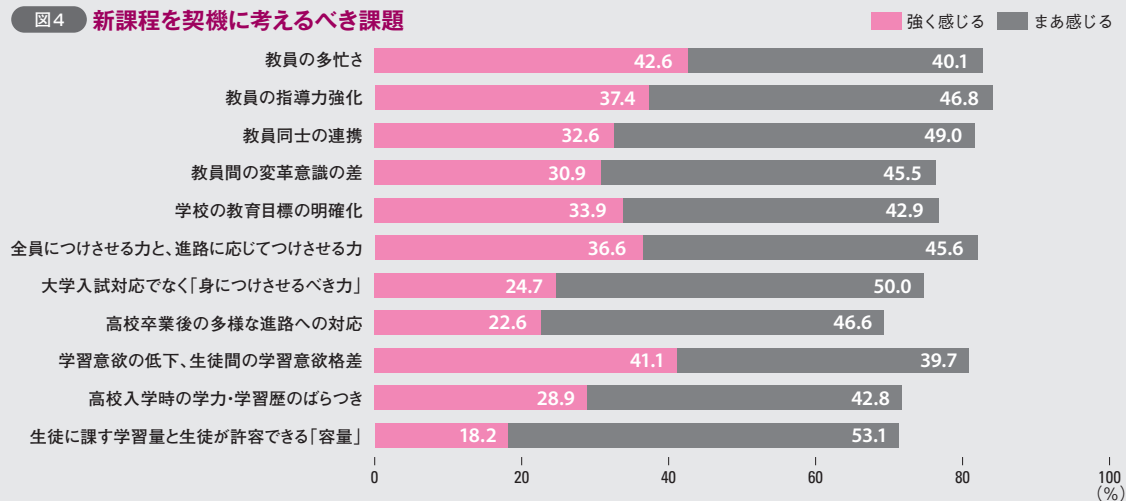
新課程の実施（*2）による影響や大学進学率5割以上という状況下で、教師はどのような意識を持っているのか。

高校新課程を前に、教師が指導上の課題として大きいととらえているものの1つは、生徒の「学習意欲の低下、生徒間の学習意欲格差」だ（図4）。中学校の新課程では、国語、社会、数学、理科、英語などの授業時数が増える一方、成績下位層対策などに充てられていた「選択教科」が原則としてなくなり、学力格差が広がる可能性もある。

大学入試が生徒の学習動機にはなりにくい中、教師が大学教育改革や高大連携事業に期待することは、オープンキャンパスの充実などではなく、「出題の趣旨などの情報」「授業評価の公表」などであり、「学び」を軸にした高大連携や大学教育の中心を重視する傾向が強い（図5）。

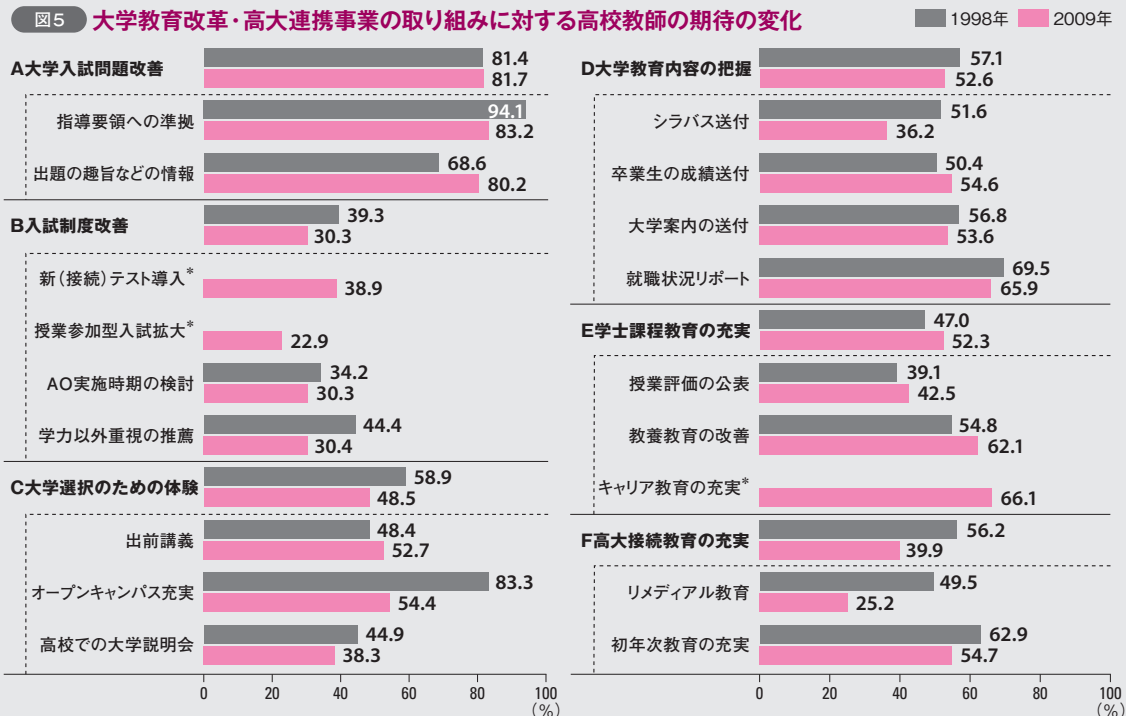
高校教師の意識、期待

図4 新課程を契機に考えるべき課題



出典/ベネッセコーポレーション「新課程に関するアンケート」（2009年7月）

図5 大学教育改革・高大連携事業の取り組みに対する高校教師の期待の変化



*1998年は調査していない

出典/ベネッセ 教育研究開発センター「進路指導・キャリア支援教育に関する高校教師の意識調査」

*2 中学校の新課程は2012年度から全面実施。高校の新課程は2013年度から学年進行で実施(12年度から数学と理科は先行実施)

高校生の「学びへの意欲」を高める高大接続

独立行政法人大学入試センター 試験・研究副統括官 荒井克弘

近年の大学入試では「生徒の学びへの意欲」を高めるのが難しいと言われる中、生徒が「自ら学びに向かう」ために高大接続部分でどのような仕掛けが考えられるのか。東北大副学長を務めた経験もある荒井克弘教授に聞いた。

大学入試以外の手段で学習意欲を高める方法が必要

現在、高校生・大学生の学力や学習意欲の低下を背景として、「高大接続テスト」(*1)などの改革が議論されています。一連の改革によって、生徒の学力や学習意欲は向上するのでしょうか。

荒井 アメリカでは、SAT(*2)と呼ばれる全国共通の検査を、大学入学の可否を審査する判断材料の一つにしています。1960年代初頭にこのスコアが急激に下がり始め、80年代初頭までほぼ直線的に下降していききました。危機感を抱いた政府は「危機に立つ国家(A Nation at

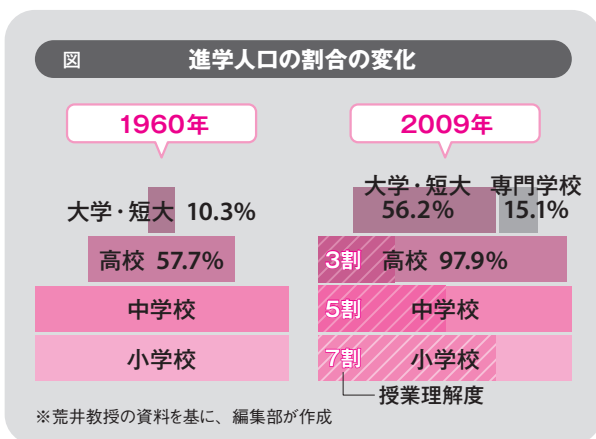
Risk)」というキャンペーンを展開し、83年から90年代初めにかけて、大規模な初等中等教育改革を断行しました。88年にはNAEP(全米学力調査)の州別データの公表にも踏み切っています。ところが、SATのスコアは80年代初頭以降、上昇に転じることなく横ばいの状態です。

この一連の事態は、制度変更や政策のみで生徒を学びに向かわせるのは難しいことを示唆しており、日本の教育改革についても、過度な期待は禁物だと思えます。

推薦入試やAO入試による大学進学者が大学入学者全体の4割を超えている今、「高大接続テスト」を学生の学力担保の切り札として期待する向きもあります。

荒井 日本の教育は、従来のピラミッド型から長方形型に転換して

います(図)。ピラミッド型であれば、一定の学力を有する人のみが上へと進むわけですから、教育の連続性は確保できました。しかし近年は、児童・生徒の授業理解度が「小学校7割、中学校5割、高校3割」といわれる状況にもかかわらず、大学・短大・専門学校への進学率の合計は7割を超えています。大学入試の制度だけを変えても、一定以上の学力を担保するのは難しいのではないのでしょうか。「高大接続テスト」の論議をする以前に、推薦入試やAO入試の入学者が4割を超えていることを問題にするべきです。私は多くても2割程度にとどめるべきだと考え

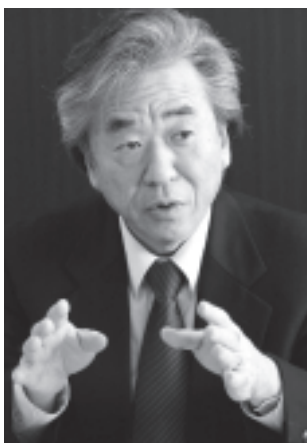


ます。
「高大接続テスト」が導入される場合、どのような活用が望ましいとお考えですか。

*1 高大接続を円滑にするために、高校段階の学習の達成度を測るテストとして導入を検討中
*2 Scholastic Assessment Test の略。アメリカの大学への進学時に、進学の適性があるかを測るための検査

荒井 大学入試時の学力評価に「高大接続テスト」を用いるという意見が多いのですが、私は、高校教育本来の学習目標を達成するための下支えになる学力試験であることが望ましいと考えます。「高大接続テスト」の基本的な役割は、「高校生は、条件さえ整えば誰でも大学に行く可能性がある」ことに対する保障ではないでしょうか。「〇〇大に合格させるために」という理由で、「高大接続テスト」を利用する方法が望ましいとは思えません。

——大学入試以外で学習意欲を高める方法を見いだす時に来ているということですか。



あらいかつひろ◎東京工業大学院理工学研究科博士課程修了。工学博士。専門は教育政策科学、教育設計評価。国立教育研究所(当時)、大学入試センター研究開発部教授、東北大学副学長等を経て現職。

荒井 おそらく、大学入試で意欲を高めさせることが出来るのは、成績上位の2割ほどではないでしょうか。私は、大学入試以外に、各教科の魅力や将来の志望など、学校教育本来の目的に即した意欲の高め方というものがあると思います。場合によつては、義務教育段階を含めた学制全体の改革を断行する勇氣が必要かもしれません。

育てたい生徒像を明確にした上で多様性を認める制度をつくる

——荒井先生は、教育制度の抜本的な改革の必要性を主張されています。具体的に、どのような方法が考えられますか。

荒井 私は、もっと柔軟に教育課程を編成してもよいのではないかと考えます。例えば、高校3年間では学習が足りない生徒には、4年間受けさせてもよいのではないのでしょうか。また、大学教育でも、小中学校の義務教育段階の内容を習得出来ていれば学べる分野もあるはずですよ。

高校から大学を「縦」に積み上げるのではなく、「横」に接続させるという形があっても良いのではないのでしょうか。生徒それぞれが持つ志望や資質に対応出来るような、許容性や柔軟性を持った教育制度を構築する必要があると思います。

——生徒の多様性を認めるべきということでしょうか。

荒井 多様な人材を入学させるためには、推薦入試やAO入試が有効だという人もいます。しかし、「学力試験を課さないから、さまざまな資質の学生が入学するようになった」ことは、決して「多様性」とは言えないことを、大学関係者は肝に銘じるべきです。本来、多様性とは、アメリカのようにさまざまな人種が混在し、所得階層が幅広い国において、入学者に偏りがなければ、入学者全体が社会の構成要素をどれだけ網羅出来ているかを考える際に用いる概念です。

日本の高校で多様性を論じる際には、「多様な生徒を一律に卒業させるために、どれだけ多様なカリキュ

ラムを用意するか」に主眼が置かれています。しかし、その前に「どのような生徒を育てるのか」という高校の使命を明確にした上で、各高校の多様性を生かす制度設計を考えなければならぬと思います。

——今後、教育関係者が心掛けていくべきことは何でしょうか。

荒井 これからは、教育コストの無駄を生じさせない「律義さ」が、教育関係者に求められるでしょう。特に、高校では民主党が公立高校の授業料の無償化と私立高校生への就学支援を打ち出し、年間4500億円の予算を計上することを公約に掲げています。(初年度は3933億円)。「高校教育の質の保証」「教育を無駄にしないような制度整備」が、今以上に求められるでしょう。

厳しい時代ではありますが、高校教育本来の理想をいかに追求すべきか、原点に立ち戻って考えるチャンスでもあります。直面する課題から目をそむけず、長期的な視野で新たな教育を模索していく時期に来ているのではないのでしょうか。

*プロフィールは取材時(2010年2月)のものです

現場からの提言

生徒を

「学び」へと

向かわせるために

大学などに進学する者、あるいは就職する者。卒業後の進路は違っても、高校生に求められる力は、自立し、学び続ける力だ。その育成に向けた覚悟と熱い思いを、学校現場にうかがった。

テーマ1

高校が抱える課題は何か

生徒に「目標をしっかりと持たせる」ことが出来ているか？

・神田芳文先生

川辺高校の学区では、近年ほとんどの高校で定員割れが続いています。多くの生徒にとって、もはや高校は、頑張らないと合格出来ないものではありません。そのため、目標に向かって計画的に学習した経験が乏しく、自分で考えて動くことが苦手です。だから、大学入試でも直前にならないとエンジンがかかからない。素直で、あいさつもきちんと出

来、ボランティアにも積極的、良いところもたくさんあります。ただ、そこそこ頑張つて、そこそこの目標を達成すれば満足だと自分を過小評価する生徒が増えた気がします。

そんな生徒に対して、私たちには「目標をしっかりと持たせる」ことが何より求められています。生徒と話す中で、進路でも学習でも常に上を目指し、挑戦したくなるように、教

師が意識的に働きかけることが必要です。これは、私がかつて勤務した伝統校でも同じだと思います。

生徒が上を目指したくなるようにするには、「授業を面白くすること」が大前提で、そのためには教師の授業力を高める必要があります。生徒の学力は多様化していますから、授業で一斉に教え、個別に育てるという流れに沿って、より重層的な指導

自信を持ってない生徒を「是認

してはいないか？

・水野謙二先生

最近の生徒を見て感じるのは、彼らが自信を持ってないことで

す。中学校時代に成功体験が少ない場合は特にそうですが、勉強も部活



岩手県立久慈高校副校長
鈴木晃彦 Suzuki Tenhiko
英語科。盛岡第一高校進路指導主事などを経て現職。



愛知県立御津高校校長
水野謙二 Mizuno Kenji
英語科。岡崎高校進路指導部長などを経て現職。



鹿児島県立川辺高校校長
神田芳文 Kanda Yoshitami
国語科。鶴丸高校進路指導課主任、同教頭などを経て現職。

計画を準備しなければなりません。

生徒は、楽しくなければ絶対に学びに向かいませんし、向かったとしても長続きしません。学びが楽しいから、難問にもぶつかっていきける。今の生徒は磨かれていない原石といえるかもしれません。原石のまま社会に送り出すのか、磨き上げ、内面に火をともして送り出すのか。今、教師の力が問われています。

動も、やれば出来るという気持ちで自分を信じて頑張り抜くことが少なくなっていると思います。

しかしそれは生徒だけの問題ではありません。生徒に自信を持たせる場であるはずの勉強と部活動とで、生徒を取り合うようなことを教師がしてはいないでしょうか。部活動と勉強は両方合わさって一人の生徒の成長に資するものです。両方頑張るのが当たり前であり、そのように努力する中で生徒は成長することを、教師こそ理解する必要があります。生徒とともにある指導の中で、そのことを実践させ、「やれば出来るんだ」と実感させることが、生徒の自信につながるのです。

これは進路選択でも同様です。生徒は、自分の現状に合わせてちよ

学びの感動を与える授業が出来ているか？

最近の生徒は主体性がないといわれます。しかし私は、生徒だけでなく、教師の主体性も自ら問うべき段

ど良いところを選び、進んでいこうとします。そして、教師もそれを是認している。しかし、それが本当に進路指導といえるのでしょうか。本人の適性を踏まえて、時には生徒自身が気が付かなかったような道を示し、挑戦させる中で自分に自信を持たせるのが高校の進路指導です。

教師一人ひとは生徒のために努力しています。それをさらに学校全体としてうまく機能させるためには、高校として目指すべき生徒像を教師が共有し、指導の視点を合わせることが不可欠です。教師が集団として、ポジティブな目標を生徒に提示して、その実現のための地道な努力を支援する。そうした環境の中で、生徒はやる気を出し、自信を取り戻していくはずだと考えています。

鈴木晃彦先生

階に来ていると思います。久慈高校の若い先生方を見ると、個性豊かで、指導はとてもアクティブです。自己

を高めようとする意識も十分に伝わってきます。しかし、授業が生徒とのコラボレーションの中での感動に結び付いているか、生徒に学びの喜びとして伝わっているかといえ、まだ改善の余地はあると思います。

本校の英語科の目標は「ざっくり言えば生徒も教師も「感動しようぜ！」です。教師が教材研究の段階で感動しているか、感動を授業で伝える思いが備わっているか、客観的に検証することが必要です。それが教師に必要な主体性だと思えます。「あの先生のように、知を楽しむ人間になりたい」と生徒の心を震わせることが

出来れば、生徒はその後の進路も自律的に歩くことができるでしょう。

感動を与える授業とは、教師という仕事が好きで好きでたまらないという人間を通して伝導されたものが、生徒の力として根付いていることを、生徒自身が気付く授業です。そんな授業でこそ、自立した学習者を育てることができる。卒業後も自分の学び方、生き方を生徒が選び取っていきける力を、授業の中で身に付けさせることを、教師は今強く意識すべきでしょう。そして教師は「ノブレス・オブリージュ」(*)の精神を忘れてはいけません。

全国の先生方のご意見

◎高校生の多くが勉強をしておらず、生きていく上で必要な**基礎学力**が不足していると思う。それでいて大学に半数が進学するという現実。基礎学力の定着で、計画性・ねばり強さ・自己分析力・評価する力・質問するための会話力・自主性など諸々の能力が身に付くはずなのに。静岡県

◎最近、保護者が我が子かわいさから、つらいことや嫌なことから子どもを遠ざけようとする傾向が「受験」の面からでも多く見られる。子どもたちの将来を考えると良い傾向とは思えないので、家庭を離れた学校で「**困難に立ち向かう姿勢と問題解決能力**」を身に付けさせたい。富山県

◎人間関係も学習活動も、そして進路選択も、**自己理解**なくして前には進まないと思う。さまざまな活動の中で、挑戦し、失敗し、悩み、そして一つひとつ課題を克服して成長していくものだ。得意なこと、できることを見つけ、力を伸ばし、社会に貢献していくためにも、自己理解を促していくことは不可欠だろう。佐賀県

*ノブレス・オブリージュ(フランス語)「高い地位には責務が伴う」の意味

生徒とどう向き合うか

1年間の生徒の成長を俯瞰した指導をする

鈴木晃彦先生

教師という仕事は、確かに日々の

学習状況などをチェックする必要もあります。しかし、生徒のテストの点数が良ければそれでいいというわけではもちろんありません。私たちは、生徒の成長を俯瞰的に見るべきで、テストはその時の一つのベンチマークとして使われるものです。途中経過に右往左往せず、1年間を見通した感動を生徒に与えられるかを重視したいものです。教師自身が自立した教育者であれば、生徒の成績の変動にその都度うろたえることはないし、ましてや「生徒が悪い」と



は言わないはずですが。

私自身も「理想とする教師像である恩師を超えたい」という思いがあつて、今も努力しています。そういう気持ちがあるから、みんな教師を続けていっているのではないのでしょうか。だから私たちは、自分自身が学ぶことを楽しんで、生徒の前でパフォーマンスをしなければなりません。

生徒による授業評価も、単なる満足度調査に終わらせず、生徒の声にもっと耳を傾けないとならないと思います。そして、なぜ生徒が出来ないかだけではなく、真摯に自分の指導の有り様を検証すべきです。例えば、テストの成績は生徒の責任ではなく、教師の責任であるという意識を持つことも大切です。

教科書を教える、問題集を解かせて、週末課題を与える、そして点検して、機械的にハンコを押す。指導がその繰り返しになっているとしたら、

ら、教師自身の考えを大きく変えなければなりません。忙しくて全部を見るのが出来ないなら、一つの問題だけでもしっかりと見て、短くても

生徒との「語り込み」で、伸びしろを知る

神田芳文先生

今の高校生の進路観には、多様性を認めてよい部分と、普遍的でなければならぬ部分があることを念頭に置いて生徒と接したいものです。

例えば、法学部志望の生徒が、成績の伸び悩みを理由に医療系の専門学校に志望変更した場合、これは多様性ではなく、安易な選択を認めただけで、石にかじりついてでもその道を目指す姿勢が必要です。そのためにも、自分を過小評価している生徒に、現実だけを直視させるのではなく、夢を持たせなければなりません。

現時点の力だけでなく、夢を持った時の伸びしろも見る。それが「担能力」だと私は思うのです。そしてそれは、生徒と「語り込む」ことで高まっていく力です。

ただ私は、「面談週間」など改ま

丁寧なコメントをする。そういう当たり前のことを通して、生徒は「この先生についていこう」と思うのではないのでしょうか。



った機会は、本来必要なのではないかと思っています。そんなことをしなくても、気になる生徒は授業後や昼休みに呼んで、話をすれば済むわけです。また私は、若手の先生には「清掃時は、目的意識を持って清掃場所に行ってください」とお願いしています。今日は誰と何を話そうかと考えてから清掃に行つてほしいのです。そして、かしまった雰囲気ではなく、一緒に掃除をしながら「部活動の練習はどう？」などとたわい

もない話を糸口に進路の話などをしていけば、それも立派な教育相談だと思っけています。そうすることで、生の生徒の状態が分かってくると思います。話そうと思えば、1か月で1人の生徒と2、3回は話せるはず。要は、

「生徒の未来」に対して責任を持つ

頑張らなくても選ばなければ大に行ける時代にあつて、生徒を学ぶに向かわせるために私たち教師はどうすればよいのでしょうか。

仮に推薦・AO入試が拡大し、学力試験を柱にした大学入試がなくなった時、これまでのように生徒を学習に向かわせることは出来なくなるのかと問われたら、すべての教師は「そんなことはない」と答えるでしょう。高校で勉強していることは、ものの学び方も含め、将来社会で生きていく上で必要な力の基盤になるものであり、大学で学問を修める際の基礎となるものです。だから入試でも問われるのです。私たち教

担任にその努力が出来るかどうか。学校は教材研究をする場ではなく、「生徒と向き合う場」だと私は信じています。若手の先生を中心に、自分分は本当に生徒のほうを向いているか、問い直していただきたいのです。

・水野謙二先生

師は、そういう力を養成することと、学ぶことの楽しさを実感させることを両立している、その自覚を持つことが第一歩だと思つています。

「生徒のために」という言葉を、私たちはよく口にします。広義では当然「目指すべき生徒像の実現のために」ということですが、こと進路面



特集 高校教育の使命

—— 学びに向かう生徒を育てる

全国の先生方のご意見

◎義務教育ではないという原則と義務教育化している現実があるからこそ、「**学ぶ楽しさ**」に気付かせていくような教育をしなければならないと思う。北海道

◎高校の3年間は子どもから大人へと変わる上でとても重要な時期である。個人差もまだまだ大きい。大きく育て切るには、**自主性の尊重と強制的バランス**が重要だと思っている。茨城県

◎大人になることは、自らの位置を知り、そこから未来に向けて自己や仕事を組み立てていく力を身に付けていくこと。その時に必要なのはいわゆる「**メタ**」の視点だ。その観点から見れば、高校現場でアウトプットの機会を多く作る必要がある。埼玉県

◎合格実績など目に見えるものだけでなく、どれだけ生徒に「**気づき**」を与え、視野を広げてやれたか、どれだけ生徒を悩ませその悩みを成長につなげられたかなど、**内面の成長という目に見えないものこそ大切なもの**だと思う。滋賀県

では、「生徒が合格するために」という意味だけではありません。「生徒が伸びるために」「生徒の学力を高めて、学問を学べる力を身に付けるために」という意味でもあります。それゆえ、高校の学習で身に付けた力を使って、生徒が自分で成長していくことが出来た時、「生徒のため」の教育が実現したといえるのです。

そう考えていくと、私たちは「生徒の今」にだけ責任を負うのではなく、「生徒の未来」に対しても責任を負っているわけです。目の前の生徒の実態を把握しながらも、自分たちが育てたい生徒像を主軸に考えな

ければなりません。もしも推薦・AO入試で安易に進路を決めようとしている生徒がいた場合、その生徒の未来に対して責任を持つなら、教師はどう行動すべきか、それは明白なはずで

そのようなスタンスで指導する中で、教師が生徒の学力養成に真剣に取り組む、生徒に学ぶ喜びを実感させる努力をしていけば、たとえ小テストであつても、生徒は学びの達成感を味わい、学ぶことを楽しむようになっていきます。生徒も、自分力をつけてくれる先生から、楽しく学びたいと思つているのですから。

学校、教師はどう変わるかが出来るか

学校活動のすべてを連動させて生徒の活力を引き出す

水野謙二先生

御津高校では2009年12月、学
力向上委員会を立ち上げました。関
係する校務分掌と学年の中から10人
が参加しています。授業が分かり、
授業で力がつくことが実感できてこ
その高校生活です。授業が楽しくな
れば、部活動などにも良い影響を与
えます。つまり、生徒に自信を与え、
元気を出させるための授業改善であ
り、学力向上委員会の立ち上げです。
委員会では、さまざまな角度から
生徒の自信回復の方法論が話し合わ
れています。例えば、「学ぶことが
楽しく、家庭での予習復習に結び付
くような授業にしよう」「英検や漢
検など資格取得を奨励し、合格した
人は全校生徒の前で表彰しよう」な
どです。部活動も一層奨励していま
す。先輩や仲間にもまれ、自分はこ
の部に不可欠な一員で、辞めたら他
の部員に迷惑をかけるという意識を
持たせ、それを自分の自信へとつな



げる。個々の生徒の頑張りをみんな
で認める雰囲気と制度をつくり、全
体の活性化としてつなげています。

特に、中学校時代に成功体験の少
なかつた生徒にとつては、これら「自
信を持たせる指導」が、分断される
ことなく、連続して存在することが
大切です。委員会の発案は私がしま
したが、運用していく中でこのアイデ
アは関係する教師からのものです。
委員会の検討内容をさらに教科や関
係分掌でもんでいく過程で、学校全
体を巻き込み、生徒の活力を生み出
す力が動き始めたと感じています。

地域の清掃ボランティアにも積極
的に取り組んでいます。昨年、「チ
ーム御津高」の文字が入ったウイン
ドブレーカーを同窓会にお願いして
60着作りました。学校の名前を背負
った生徒が、自分たちが出来ること

ベテラン教師が率先してコーチングを

鈴木晃彦先生

生徒の学習意欲を高めるために最
も求められているのは、授業力の向
上です。では、どのような方法で授
業力を高めるのか。私は、ベテラン
の教師が意識的に若い教師に自分の
授業を見せることが大切だと思っ
ています。つまり「コーチング」です。

そこには、若い教師のためだけで
はなく、むしろ自分をさらけ出すこ
とによってベテラン自身の授業力も
向上させる狙いがあります。私自身
意を決して「自分の授業を見てもら
えないか。声が欲しい」と若い先生
を誘うようにしています。また、本
校では校長の発案で授業を映像記録
に残しています。授業力は人の目に
さらして初めて向上します。模範的
な授業を「見ているだけ」では授業

で地域に貢献し、自信を深めていく。
すると、地域の人たちにも今まで以
上にきちんとあいさつが出来るよう
になります。学校、地域で、自分の
存在を認めてもらい、学校全体が元
気になることを目指しています。

力は向上しません。「真似る。そし
て工夫する」ことが不可欠です。

授業がうまくいけば、生活指導、
進路指導にも連動していくと信じて
います。授業が成功すれば、生徒を
自ら学ぶ「自立した学習者（人間）」
に出来る。学校がすべき最も重要な
保証は、これではないでしょうか。

いろいろな経験、価値観の先生が
チームになっっているのが学校です。





私たちは「忙しくて生徒との時間が取れなくなった」と口にし、確かに多忙は事実ですが、その中

生徒のせいせず、責任を持つのは教師という自覚を

・神田芳文先生

ベテラン、管理職が意識してプラスの方向に自分の姿をさらけ出すことが集団の力になります。若い先生にとつて時には疎ましく思えるかもしれませんが、長い目で見れば、それは必ずプラスになります。何より、若い先生自身が自分の教師としての成長を俯瞰的に見ることが出来れば、きつと受け入れられるはず。ベテランも若手もお互いをさらけ出し、自分の授業をどう思うか、学

校の指導は昨年度と同じでよいのか、お互いに意見を求め合えば、教師の意欲は一層高まるでしょう。

生徒も教師も、長いスパンでどこかで花開けばよい。教育では、拙速に答えを出すのが良いとは限りません。生徒に対して、また教師同士でも、すぐに答えを求めすぎではないでしょうか。私たちは、もつとじっくり生徒たちを見つめ、悩み、答えを探していくべきだと思うのです。

あつても生徒と向き合う時間はやはり確保しなければならぬ。そのためには、これまで以上に先を見通して仕事を進めることが教師には求められると思います。1週間先に模試が、1か月後に期末考査があるといったことは、年間計画表を見れば分かることなのに、行事の直前になって慌ただしく動いていることがよくあります。私は30代前半で初めて学年主任を務めた時、先輩に「常に2、

全国の先生方のご意見

◎高校教育の現状は「初等教育後期」。高い進学率の中、**学びの意味を時間をかけて教えられる最後の機会**だ。これは、細分化された大学のシステムでは無理だろう。社会が流動化し、教育が手段化（例えば、大学選びは就活の準備という発想）する中、学びの意味が矮小化し、国家的問題に発展するのはと危機感を抱いている。**福島県**

◎中学校の先生方と高校教師との連携が必要。特に、教科レベルで密な連携がほしい。多様な生徒がいる中学校の事情を踏まえ、高校現場についても知ってもらうことが大切だ。**新潟県**

◎社会で共生する力（協調性、思いやりなど）を育成することと、そのための普遍的な力（コミュニケーション能力や思考力など）を付けていくこと。また、社会の中で力強く生きる力を鍛えていくことも大切。「**社会との接続と、そのための人材育成としてのキャリア教育**」が必要だ。授業も部活動も進路指導もその一環であり、受験勉強もその観点でとらえている。**三重県**

3週間先を見なさい」と言われました。前もって出来ることをしておけば、忙殺されることも少ないのではないのでしょうか。パソコンが入ったぶん、昔と比べて楽になった作業も間違いなくあるのですから。

教師一人ひとりが意識を変えながら、学校としての授業力向上の取り組みも必要です。本校では2010年度から地元中学校と連携した教科研究会をスタートさせようと考えています。これまでも小中高連携で公開授業などを行ってきましたが、更に進めて定期テストの問題をお互いに見ることで、双方の授業改善、授

業力向上に役立つと期待しています。特に、若い先生方には、学ぶ機会と多い機会となるはず。私は、今の子どもたちに学習意欲がないとは思っていません。教養系のクイズ番組が人気を集め、「歴女」という言葉がはやるなど、学びが面白ければ生徒はついてくることはむしろ明らかです。もしかすると、我々が原石を磨いていないのではないのでしょうか。もはや、「生徒が悪い」では学校は変わりません。まず教師が自分を振り返らないと。生徒は、教師を選べません。ならば責任を持つのは、教師であるべきです。



静岡県立
伊東高校

成績層別指導

生徒の意欲を刺激する 成績層別の課題と補習で 学力底上げを実現する

◎「自律・創造・敬愛」を校訓として、豊かな感性、確かな知性、健やかな心身を育成し、開かれた学校づくりを目指す。1学年5クラス編成で、国公立大を目指すP(プレパトリー)コース1クラス、私立大・短大・専門学校・就職を目指すC(コンプリヘンシブ)コース4クラスから成る。

設立	1933(昭和8)年
形態	全日制・定時制／普通科／共学
生徒数	1学年約200人
09年度入試合格実績(現浪計)	国公立大は、茨城大、静岡大、浜松医科大、釧路公立大、秋田県立大、高崎経済大、首都大学東京、静岡県立大、宮崎公立大などに20人が合格。私立大は、慶應義塾大、日本大、東京理科大、法政大、明治大、立教大、同志社大、関西学院大などに延べ225人が合格。
住所	〒414-0055 静岡県伊東市岡入の道1229-3
電話	0557-37-8811
Web Site	http://www.shizuoka-c.ed.jp/ito-h/

変革のステップ

背景	実践	成果
<p>◎入学段階での成績上位層の流出や入学定員割れにより、成績中下位層の生徒が増加</p> <p>STEP 1</p>	<p>◎成績層別の課題や補習で自信を持たせ、成績上位層の友だちをチューターとする制度で意欲を高める</p> <p>STEP 2</p>	<p>◎成績下位層が減少し、中上位層が増加。生徒同士が自律的に学び合う雰囲気が生まれる</p> <p>STEP 3</p>

定員割れを乗り越え
国公立大合格者が3倍に

静岡県立伊東高校が2005年度の高校入試で初めて定員割れとなったことは、同校の教師に大きな衝撃を与えた。

同校のある伊東市は、伊豆半島東海岸の中ほどにある温泉で有名な町だ。学校までは、東海道本線の熱海駅から電車とバスを乗り継いで約40分かかる。東海道本線から離れた場所にあることが、それまで地域の優秀な生徒を確保する機能を果たしていた。しかし、少子化に加え、交通事情の変化や他地域の進学校の共学化などの影響により、次第に成績上位層の流出が目立つようになった。そして、ついに初の定員割れという事態となったのだ。

しかし、そのことがかえって、「自校を選んで入学してくれた生徒のために頑張ろう」という教師の熱意を巻き起こした。進路指導主事の釜谷和宏先生は、当時を次のように振り返る。

「定員割れとなった学年は、学力が低いことの深刻さに加え、服装やあいさつなどの容儀・礼儀面でも課題がありました。そこで、経験が豊富な教師で担任団を組織し、学年が一丸となって、生徒指導を徹底し、提出物は必ず出させ、補習を充実させるなど、生徒が学びに向かう姿勢をつくることに注力しました。その結果、卒業時には国公立大に58人が

合格するという、例年の3倍近い実績を上げることが出来たのです。このことは、後輩の生徒たちはもちろん、指導に当たった教師にとっても『やればできる』という大きな自信になりました」

しかし、成績上位層の指導がうまく実績に結び付いた反面、中下位層の指導が手薄になり、中堅私立大の合格者数が伸び悩むという課題が残った。そして、その総括がなされた直後の08年度高校入試で、再び定員割れとなる。2学年主任の塚本裕之先生は次のように述べる。



釜谷和宏

静岡県立伊東高校
教職歴34年。同校に赴任して6年目。進路指導
主事。「自分を粗末に扱わない」



稲葉渉

静岡県立伊東高校
教職歴15年。同校に赴任して5年目。進路課。「生徒たちが自律的な進路決定が出来るよう支援していきたい」



塚本裕之

静岡県立伊東高校
教職歴13年。同校に赴任して8年目。2学年主任。「唯一無二の高校生活を今出来るベストで支援したい」



野田正人

静岡県立伊東高校
教職歴9年。同校に赴任して4年目。2学年主任。「生徒と共に学び、高めていけるような教師でありたい」

「08年度の入学生は成績中下位層が更に拡大し、学力的には05年度入学生以上に厳しい状況でした。今までと同じ指導では、結果は見えていました。上位層を更に伸ばすことと併せて、中下位層の底上げを図る指導が必要だと考えました」

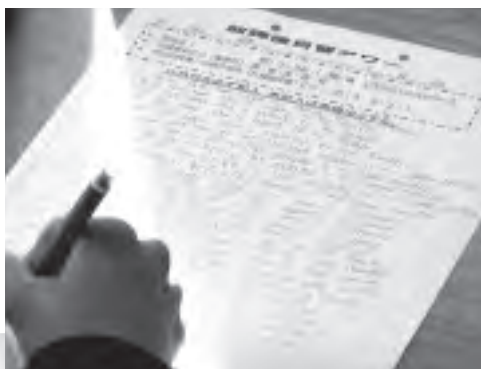
**毎日最低約30分の自習を課し
まずは学習習慣を定着させる**

08年4月、1学年団の挑戦が始まった。まず留意したのは、学習習慣の定着だ。4月に実施したスタディサポートから「過年度と比較して学習習慣が身に付いていない生徒が多い」という状況が見えてきた。まずは高校生として必要な学習習慣の確立が急務であると考え、6月、成績下位層を対象に「放課後自習アワー」を行った。定期考査の3教科(2年次からは5教科)の総合偏差値42を下回った生徒を、放課後に一つの教室に集め、その日の授業の復習をさせるという取り組みだ。

期間は定期考査後の2〜3週間で、木曜を除く週4日。部活動に支障がないよう、放課後の清掃は免除、運動部加入者は30分、文化部(週1回の部活)加入者は1時間とした。復習に使うB4判のプリントには、自分が自習に選んだ教科名(国数英理地歴公)と、その日の授業の反省を5段階評価で記入する欄だけを印刷し

た。生徒は科目を自由に選び、ほとんど白紙に近いプリントの両面を使って自習する。自習を終えた生徒は、監督の教師に提出し、教師はそれをチェックしファイリングする。

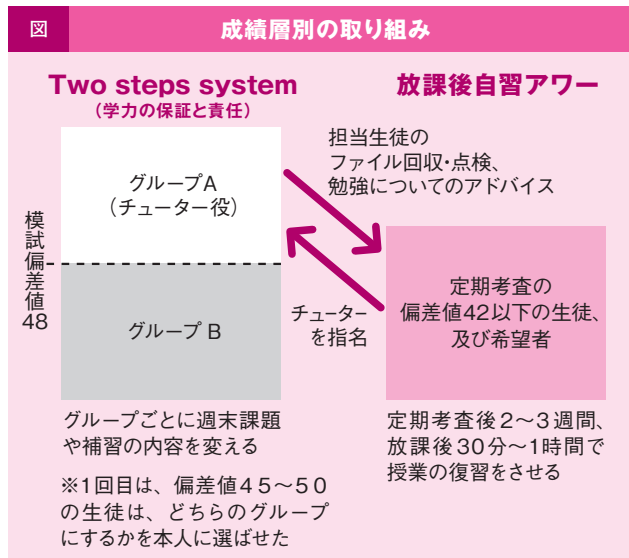
「私たちは、このプリントだけで生徒の学力がすぐ上がるとは考えていません。学習習慣が未定着であるこの層の生徒に、まずは机に座って集中して勉強する姿勢を身に付けさせたいと考え、この形式にしました。また、復習プリントというと、問題と解説があるものをイメージしがちですが、それでは教師の負担が増えるばかりです。取り組みを続けるために、出来るだけ負担をかけずに教材を作りたいと考えました」(塚本先生)



「放課後自習アワー」を欠席する生徒はほとんどいない。補習や追試で欠席する場合は、自宅でプリントに取り組み、翌日に提出する



*プロフィールは取材時(2010年2月)のものです



**模試結果を基にした生徒による
グループ選択で全国に目を向けさせる**

上位から下位まで幅広い成績層への対応も、大きな課題だった。教材や課題、補習は成績中下位層を中心にレベルを設定しなければならず、難関大を志望する成績上位層を伸ばすには難があった。そこで、1年次の11月に始めたのが「Two steps system(学力の保証と責任)」だ。目標の異なる二つのグループを設置し、生徒は模試偏差値を基準に所属したいグループを自ら選択し、教師はそれぞれに合った課題や補習、情報提供を行うことにした(図)。

1回目は1年生7月模試の結果を基に、国数の総合偏差値で、学年全体を上中下の3つに分けた。そして、上位層はA、下位層はBへ振り分け、偏差値45~50の中間層はA/Bいずれに所属するかを、生徒自身に選ばせた。

2回目は1年生1月模試の結果を受けて2年生になる4月に、3回目は2年生7月模試を受けて9月に行った。グループBの生徒がグループAに入るには、偏差値48を超えることが条件となる。逆に、グループAの生徒は偏差値48を下回ればグループBとなる。ただし、グループAとなっても、課題が難しいと感じたらグループBを希望することも可能だ。

グループ分けの基準を模試偏差値としたのは、全国に目を向けてほしいという思いからだ。進路課の稲葉渉先生は、次のように説明する。

「本校には素直でおっとりとした生徒が多く、将来の高い展望や競争意識を持ちにくい傾向があります。全国模試の成績に目を向けず、ともすれば定期考査や校内テストの結果だけで満足してしまう。そして、3年生になって初めて大学入試の厳しさを知り、第1志望をあきらめる生徒が多くなりました。全国模試の偏差値を基準とすることで、早い時期から視野を広げ、目標を高く持たせ、一つ上の進路を目指す意識を養いたいと考えました」

グループごとの目標も明示した。グループAは地元の静岡大を中心とした国公立大、グルー

プBは日東駒専(*)などの中堅私立大を、志望校に掲げた。

「自分には学力的に無理だと思い込み、志望を下げがちな生徒に、具体的に目標とする大学を示すことで、『行けるところに行く』のではなく、上を目指す意識を持たせようとなりました」(塚本先生)

**グループ分けにより
指導の焦点化が進む**

グループ制は、あくまで教師が提供する課題や情報を絞り込むための区分であり、習熟度クラスのような縦割りのシステムではない。補習などでグループごとに活動する場面はあるが、普段の授業やLHRは学級単位で行う。

グループの違いが最もよく表れるのは、週末課題だ。例えば、最初のグループ分け直後に出した英語の週末課題では、グループAは長文読解問題、グループBは単語の暗記を課し、翌週火曜日に行った週末課題テストはA/B共通の問題で、Bに暗記させた単語から出題した。グループBの生徒は週末課題にきちんと取り組んでいれば、グループAの生徒より点数が取れるので自信になる。グループAの生徒には語彙力の必要性を自覚させることで、主体的な学びにつなげようという狙いだ。また、追試の設定もグループで異なる。グループAは主体性を養うた

*日本大(日)、東洋大(東)、駒澤大(駒)、専修大(専)を示す

めに追試をしないが、グループBは強制的にも定着させることが重要なので、追試を行う。

夏休みや冬休みの補習は、様変わりした。それまでは、各教科が「国語基礎」「数学基礎」など講座を設定し、希望者のみが補習に参加していた。「Two steps system」の導入後は、冬休みの補習は原則として全員出席とし、グループAは進学補習、グループBは自習（冬休みの宿題）が課されることになった。

グループAは2クラスを設定し、国語と英語の補習を交互に行う。教師は各教科1人で足りる上、講座を設定して募集をする必要がなくなったので、負担が減った。

「補習期間中は毎日SHRを行いました。生徒全員が登校して補習や自習に取り組みることによって、学年の一体感が強くなったと感じています」（稲葉先生）

友だちをチューターにし 互いに学び合い、意識を高め合う

生徒が互いに学び合い、意識や学力を高め合う工夫も凝らしている。

「放課後自習アワー」を始めてから、生徒の学習力は上がりました。しかし、自習プリントの内容を見ると、学習方法が悪い、内容が薄いとといった粗っぽさが見られました。量だけで質が伴わないのでは、学力は底上げさ

れません。そこで、成績上位層の生徒が下位層の生徒を指導することで、生徒同士が互いに高め合い、成績下位層の底上げを図る狙いで、『学年チューター制』を2年生になってから始めました」（塚本先生）

「放課後自習アワー」の参加が決まった生徒に、「チューター希望確認用紙」を配布。翌日までにチューターになってもらう友だち（グループAの生徒に限る）を探し、了承の直筆サインをもらう。チューター1人に対して、最大2人まで自習対象者を付けることが可能だ。

「学年チューター制」は、「放課後自習アワー」と「Two steps system」をつなぐ役割も担う。グループ制導入時に最も懸念されたのは、グループAとBの生徒の意識が乖離してしまうことだった。そこで、グループAの生徒にはチューターを引き受けることを所属条件とし、グループBの生徒が自らチューターを選ぶことで、グループ間の意識の壁を取り除こうと考えた。2学年担任の野田正人先生は次のように話す。

「自習対象者はチューターからアドバイスを受けることで、効果的で効率的な学習方法を体得できます。チューターは友だちに頼りにされることで、自己効力感を高め、また友だちに教えることによって自分の不足部分に気付きます。07年度の大学入試で実績が伸びた時も、生徒が学び合い、教師はそれを見守るといふ雰囲気がありました。3年生に向け

て自律的に学び合う雰囲気を醸成できれば、『受験は団体戦』を実現出来、1年後の入試でも良い結果が得られると期待しています」

「放課後自習アワー」でのプリントの回収やファイリングを、チューターに行わせることで、教師の負担軽減にもつながっているという。

生徒の学習力は向上 他学年への波及が課題

改革から2年がたち、成果はスタディサポートや進研模試の結果に表れている。グループAの生徒が順調に増えているのも、全国模試の偏差値を意識させる指導の成果だろう。

課題は、一連の取り組みが現2学年のみにとどまっていることだ。今後、いかに全校に波及させていくかが、安定した実績を上げるためにも不可欠になる。ただ、教師が求めているのは進路実績という「数値」だけではない。

「大学進学実績はもちろん大切ですが、それ以上に重要なのは、この過程を通して、生徒が目標に向けて頑張ることの大切さ、友だちと支え合う素晴らしさを体験することです。私たち教師に出来るのは、生徒に目標を意識させ、生徒同士が学び合う雰囲気をつくることくらい。生徒が可能性を信じて高い目標に挑戦出来るよう、入試本番までの1年間、生徒を支え続けたいと思います」（塚本先生）

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトをご覧ください。

2009年12月号特集「学力下位層の拡大にどう向き合うか」など

▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)



神奈川県・私立
自修館中等教育学校

学校改革

◎1999年設立の私立の中等教育学校。兄弟校に100年の歴史を持つ向上(こうじょう)高校がある。「明知」「徳義」「壮健」を建学の精神として、自学・自修・実践できる「生きる力」の育成を目指す。教養主義を打ち出し、文理に偏らず6教科7科目に対応できる幅広い学力の習得を目指す。

設立	1999(平成11)年
形態	全日制/普通科/共学
生徒数	1学年約120人
09年度入試合格実績(現浪計)	国公立大は、北海道教育大、岩手大、東京学芸大、東京工業大、横浜国立大、高崎経済大、横浜市立大などに16人が合格。私立大は、青山学院大、学習院大、慶應義塾大、上智大、中央大、法政大、明治大、早稲田大、南山大、立命館大などに延べ306人が合格。
住所	〒259-1185 神奈川県伊勢原市見附島 411
電話	0463-97-2100
Web Site	http://www.jishukan.ed.jp/

授業改革と 振り返りシートで 教師の意識が変わる

変革のステップ

<p>背景</p> <p>◎日常業務の多忙化により、教材研究など授業力向上に必要な時間が不足</p> <p>STEP 1</p>	<p>実践</p> <p>◎時間割の変更、習熟度別授業の整理など、大胆な学校改革を若手教師中心に推進</p> <p>STEP 2</p>	<p>成果</p> <p>◎教師の意識が授業改善へと向き、模試の活用など学年独自の取り組みも始まる</p> <p>STEP 3</p>
---	---	--

日常業務の多忙化が
授業の質向上を阻害

日常業務に追われ、授業の準備や教材研究に時間をかけられないことに悩む教師は多い。神奈川県伊勢原市にある自修館中等教育学校は、大胆な制度改革とカリキュラム改編を行い、この課題に真正面から取り組んできた。

同校は、1999年に開校した私立の中等教育学校だ。1期生は、募集定員90人(30人×3クラス)に対して入学者は54人。偏差値が30台前半の生徒も含まれ、学力的に厳しい状況だったが、3期生が受験した07年度入試では一橋大、自治医大の合格者が出た。続く08年度入試では、東京大の合格者が輩出。生徒の進路希望にえられる進学校として、地元で広く知られるようになった。5期生からは募集定員を120人に拡大。大学入試合格実績も年々伸び、5期生(09年度入試)では、国公立大合格者は1期生の2人から16人に、早慶上智と東京理科大は1期生0人から20人に、GMARCH(*)は1期生1人から79人になった。

開校以来、順調に発展してきたように見えるが、教師の危機意識は強い。進路情報室長の川澄勤先生は次のように振り返る。

「3、4期生の入試実績が好調だったのは、生徒の実力によるものでした。地域の信頼を得るためには、勉強に自信がない生徒の志望

*GMARCHは、学習院大(G)、明治大(M)、青山学院大(A)、立教大(R)、中央大(C)、法政大(H)を示す

も実現させ、安定した進学実績を上げることがかせません。特に本校は、教師の平均年齢が約34歳と若く、経験面で伝統校に及びません。本校の更なる発展には、授業の質を高める努力が必要だと考えていました」

質の高い授業をするためには、準備や教材研究を入念に行う必要がある。1回1回の授業を検証し、改善を加えることも大切だ。しかし、行事が重なって臨時の時間割が多い、習熟度別のクラス編成のため受け持つ授業の種類が多いといった理由により、一つひとつの授業の準備に時間をかけられないという実情があった。授業力向上のためには、これらの課題に正面から向き合い、抜本的な解決を図る必要があった。

保護者からの支持が 校内の合意形成に結び付く

転機が訪れたのは05年度のことだ。この年に



自修館中等教育学校
川澄 勤 Kawasumi Tsutomu
教職歴12年。同校に赴任して9年目。進路情報室長。「苦しいのは自分に負けているから」



自修館中等教育学校
海老名 名豊昭 Ebina Toyoki
教職歴10年。同校に赴任して9年目。第5学年主任。「他人を動かすには、まず自分から」

着任した東野眞元校長が改革を望む若手教師を集め、改革の素案づくりに着手したのである。

当初は若手教師の有志5〜6人の小さなプロジェクトに過ぎなかったが、テーマに応じてほかの教師の意見を聞いたり、議事の進行状況を公開したりするなど周知に努めた結果、06年度には「改革推進委員会」に格上げされ、有志の委員は12〜15人となった。

毎週月曜の19時から行う委員会では、カリキュラムや習熟度別授業、学校行事、部活動、校務や会議の進め方など、あらゆることが議題となった。委員会は次第に熱を帯び、終了時刻が22時を過ぎることも珍しくなかった。

ただ、急進的な改革に疑問を抱く教師もいた。改革の中心的存在だった川澄先生は、当時、赴任5年目。そのほかの委員も20〜30代の若手教師がほとんどだった。「経験の浅い教師が中心となって改革を進めるのは納得出来ない」「学校のことをよく知らないのに、どのように改革するのか」という声が上がった。

「開校当初から尽力されてきた先生方にとって、若手教師に学校を変えられることは、自分たちのしてきたことを否定されているようなものであり、批判するのは当然だと思いましたが。反対意見がある中で、同意を得ずにシステムだけを変えても実効性は薄いと思いました。委員会発足後の2年間は、改革の議論と並行して、先生方への周知、説得にも努

めました」(川澄先生)

委員は、反対意見に対する回答を丁寧に何度も行い、思いを伝えると共に、生徒のアンケート結果などの客観データも活用し、「改革の必要性」を訴え続けた。同時に、保護者への説明も怠らなかつた。当初、保護者の間にも学校改革を不安視する声があったからだ。保護者説明会を開き、改革の狙いを説明するだけでなく、「もっと話を聞きたい」「こういうことをしてほしい」という保護者に対しては、少数者の懇談会を何度となく設けて周知に努めた。少数意見にも耳を傾け、丁寧に説明することで、次第に理解を示す保護者が増え、それに呼応するように校内の反対意見もなくなっていったという。

前回の授業の反省を 次回の授業に即時反映

08年度、ついに新たなカリキュラムを導入した。大きな変更は、授業時間の増加だ。それまで、授業は週5日で、午前が1コマ80分・50分・80分の計3回、午後は月・水・木が1コマ50分・80分の計2回、火・金が50分の1回だった。それを、08年度には、週6日(月曜日から金曜日は6回、土曜日は4回)、すべて1回50分として、総授業回数は23回から34回へ、総授業時間は1540分から1700分に増やした。

また、学力をバランス良く付けさせるため、

選択科目は文理の垣根を出来る限り低くした。

「受験に必要な科目かどうかという考え方は、社会に出れば全く意味がありません。文理いずれかに偏らず、教養をバランス良く積み上げ、大学進学後も通用する学力を身に付けてほしいと考えています」(川澄先生)

教師が授業改善に取り組みやすい環境も整えた。同校の前期課程(中学1〜3年)は1学年4クラスだが、1人の教師が同一学年を担当し、各クラスに対して同じ授業を1日4回行えるような体制とした。以前は、1人の教師が2〜3学年にまたがって授業を受け持っていた上に、習熟度別授業が加わり、担当する授業が4種類にも5種類にもなっていた。授業のほとんどは1回きりのものとなり、反省を生かすチャンスは巡ってこない。同じ学年で同じ授業を続けて出来るにしても、1、2日と空くと、反省を次の授業に生かそうという意識はどうしても薄れてしまう。

そこで、1人当たり、多くても2つの学年の担当とし、習熟度別授業は後期課程(高校1〜3年)で行うことよって、1日に4回、同じ授業を行える体制と時間割とした。この方法ならば、教師は同じ内容の授業を続けて4回行うので、前の授業の反省をすく次の授業に生かせ、更にクラス間で進度のズレが生じることも少ない。受け持つ学年が少なければ、それだけ一人ひとりの教師に課せられる責任も明確になる。

「授業力を高めるには、教師も失敗を積み、試行錯誤を重ねることが重要です。ただ、失敗を失敗として自覚するためには、十分に授業の準備をし、全力で授業に取り組むことが大前提となります。全力で取り組んだからこそ、何が駄目だったのかを本気で考え、改善に向けて努力出来るのです」(川澄先生)

「振り返り」を重視し 生徒に自分の課題を発見させる

一連の改革により、授業の準備やLHRなどにかかる時間が、以前よりも格段に増えた。今は、その時間を指導改善に生かす動きが広がりつつある。

現5学年(高校2年)では、08年度から、模試や定期考査、学校行事や家庭学習など、さまざまな場面で、生徒に「振り返り」をさせる機会を設けている。以前は不定期だったLHRが週1回きちんと実施できるようになって、可能になった取り組みだ。「振り返り」では、学校独自の「振り返りシート」を使う。例えば、模試ではどれだけ事前準備をしたのか、結果からどのような課題が見えてきたのかを記入させる(図1)。5学年主任の海老名豊昭先生は、その狙いを次のように説明する。

「模試の『振り返りシート』は、模試を通して生徒が自ら弱点を見つけ、克服する過程

を体験させることが狙いです。更に、教師の意識改革を促す上でも重要だと考えています。教師の中には『模試は実力を測るためのものであり、事前対策をすべきではない』という声もあります。しかし、『振り返りシート』の運用を通して、模試の役割を再確認し、模試も活用しながら生徒を学びに向かわせる工夫をしてほしいと考えています」

定期考査では、試験2週間前に試験範囲の一覧と対策のアドバイスを記したプリントを配り、事前に計画を立てさせる。試験後は、「振り返りシート」に「試験勉強として成功した学習方法」「来学期にやるべきこと」を記入させ、学習方法が適切だったのかを確認させ、次のアクションにつなげさせる。

ユニークなのは、「学期ごとの振り返り」だ。授業の準備や家庭学習の取り組み方を記入させ、家庭学習の重要性を意識させるだけでなく、学校生活にかかわる質問も投げかける(図2)。

「『ルールを率先して守ったか』『魅力ある先輩と比較して)自分に足りないものは何か』など、自分の生活を確認させることは、それが出来ている生徒は自信や安心感が得られます。出来ない生徒にとっては、これから何を意識して学校生活に臨めばよいのかを自覚するきっかけになります。こうした『振り返り』の機会を大切にすることが、ひいては学校への帰属意識や、落ち着いて勉強に取り組



福井県立
若狭東高校

自己肯定感の涵養

心の内を引き出す 「書かせる指導」で 生徒の自信を高める

◎1920年に遠敷（おにゅう）郡立遠敷農林学校として開校。「進取・敬愛・誠実」を校訓に、豊かな人間性を涵養する教育を目指す。部活動も活発で、ラグビー部は全国大会常連の名門。大学などへの進学率は5割で、5割は地元企業を中心に就職する。

設立
1920(大正9)年
形態
全日制／普通科・産業技術科・生活科学科・電子機械科・電気科／共学
生徒数
1学年約190人
09年度入試合格実績
国公立大は、福井大、福井県立大に4人が合格。私立大は、中央大、東京農業大、和光大、金沢工業大、金城大、仁愛大、名古屋商科大、大同工業大、岐阜経済大、京都産業大、大阪学院大、大阪国際大、大阪商業大、関西大などに延べ27人が合格。
住所
〒917-0293 福井県小浜市金屋48-2
電話
0770-56-0400
Web Site
http://www.wakasihigashi-h.ed.jp/

変革のステップ

背景

◎普通科の生徒の自己肯定感が薄く、進学実績の低迷などにより保護者の学校に対する信頼度が低下していた

STEP 1

実践

◎生徒と担任の交換ノート、週末課題、小論文講座など、生徒の思いを書かせる機会を数多く設ける

STEP 2

成果

◎生徒の自己肯定感や学校への帰属意識が高まり、大学進学率と就職率も向上する

STEP 3

「どうせ自分には出来ない……」
劣等感にとらわれる生徒たち

2006年4月、福井県立若狭東高校の入学式。この年に県内の進学校から同校に赴任した中森一郎先生は、入学式後、担任を受け持つ普通科クラスの教室に行つて驚いた。

「同じ高校生なのに顔付きが違う……」

高校の入学式は、十代で最も希望に満ちた日の一つのはずだ。ところが、生徒の目には、期待や晴れやかさがあまり見てとれなかった。

同校は普通科、農業系学科、工業系学科を擁する総合高校だ。地元小浜市で普通科のある公立高校は同校と福井県立若狭高校の2校で、普通科を目指す生徒の成績中上位層は若狭高校へ、下位層は同校へ進学するという流れが出来ていた。高校入試の合格発表の場で教師が「おめでとう」と声を掛けても、あまりうれしそうではない生徒もいた。保護者の学校に対する信頼感は厚いとは言えず、入学式や懇談会などの場で「進学実績があまり良くないのですね」と言われることもあった。

中森先生は、自校の状況を次のように話す。

「生徒の多くは『どうせ自分には出来ない』という思いにとらわれ、授業態度は受け身になりがちで、自ら考えようとしませんでした。コミュニケーション力に乏しいために友人関係を築けず、トラブルが起きても自分で

修復出来ません。教師の姿勢も、生徒のそうした傾向に拍車をかけていたように思います。教師一人ひとり努力していたのですが、生徒にどのような力を付けたいのか、教師間での共通認識がないため、進路指導のビジョンが描けない状態でした」

ノートによる「対一」の対話が 生徒の心を開かせる

こうした課題を受け、普通科の改革に着手し



福井県立若狭東高校
中森 一郎 Nakamori Ichiro

教職歴25年。同校に赴任して4年目。進学指導室長。「一人ひとりの生徒の中ですべての答えがある」



福井県立若狭東高校
森 早苗 Mori Sanae

教職歴29年。同校に赴任して6年目。普通科長。「どんな一歩も無駄にはならない。可能性を信じて生徒と共に歩んでいきたい」



福井県立若狭東高校
東山裕紀 Higashiyama Hiroki

教職歴11年。同校に赴任して10年目。進学指導室3学年担当。「当たり前の行動を恥ずかしがらずに実践できる生徒を育てたい」



福井県立若狭東高校
松村愛子 Matsumura Aiko

教職歴3年。同校に赴任して1年目。教務部。「何事も枠にとらわれず、広い視野を持ちたい」

たのは07年度のこと。「生徒の自己肯定感を高めること」を最大の目的とし、その指導の中心に据えたのは「書かせる」ことだった。

「生徒が自ら発信する機会を多く設け、主体的に考える習慣を身に付けさせることを狙いました。また、何度も書くうちに、自分を表現する喜びを知り、自信が付くのではないかとという期待もありました」（中森先生）

書かせる指導の主軸は、「エピソードノート」だ。1人1冊のノートを用意し、生徒が学校行事や講演会など、折に触れて感想や思いを書いて提出し、担任がコメントを書いて返すというもの。書かせる機会や提出の頻度などの運用方法は、担任の裁量とした。体育祭や文化祭などの学校行事以外にも、「服装検査についてどう思うか」「掃除をさばることにどう考えるか」といった、高校生活に関する意見を求める教師もいる。毎日の生活を振り返る機会を多く設けることにより、自ら考え行動する習慣を付けてほしいという狙いもある。

教師と「対一」でつながる「エピソードノート」の存在は、生徒の精神面の安定にもつながっている。普通科長の森早苗先生は次のように話す。「本校の生徒は他人から認められた経験が少なく、『先生に構ってほしい』『先生を独占したい』という思いが強いようです。教師が愛情を注げば注ぐほど、生徒はそれに応えようと、教師が手をかけた分だけ伸びていく

のです」

普段はほとんど話さない生徒が「エピソードノート」では雄弁であったり、心を閉ざしていた生徒がノートの提出を繰り返すうちに思いを明かすようになったりすることもある。対一の濃密なコミュニケーションが生徒と教師の距離を縮め、担任に対する信頼感を醸成しているのである。

教師の個性が反映された週末課題で 生徒の思いを引き出す

週末課題も「書く」ことを中心にしている。新聞記事を課題文として、読み取りや要約、感想などを100〜200字で書かせる。週の初めの国語の授業で、答え合わせをしたり、生徒同士に相互評価をさせたりしている。

これは07年度1学年の教師3人が始めた取り組みだったが、08年度からは普通科の教師全員で年1回の持ち回りとし、課題プリントの作成を担当することにした。課題文の選定や作題は、担当者任せられている。例えば、体育科教師はオリンピックの記事を選び、英語科教師が選ぶ課題文は英語となるなど、教科の専門性や教師の個性が反映されたプリントが多く、生徒は意欲的に取り組むという。

中には自分の思いをうまく文章に出来ない生徒もいるが、決して自分の意見がないわけでは

ない。生徒の思いをいかに引き出して書かせるかは、教師の指導力にかかっている。国語科の松村愛子先生は次のように述べる。

「自分の意見や思いはあるものの、どのよう
うに表現すればよいのか分からない、人目を
気にして『それらしいことを書かなければな
らない』という思い込みにとらわれて書けな
い、ということもあります。そうした生徒に
は、生徒に問い掛け、思いをうまく引き出し
ていくことが大切だと思います。生徒に質問
をして出てくる単語をつなげて、教師がある
程度の文章にしてから、その続きを書かせた
りしています。『筆者の意見と違っていても
よいから、自由に書いてごらん』とアドバイ
スもします。『何を書いてもよい』と分かれば、
生徒は自分の思いを生き生きと表現するよう
になります」

書かせるポイント 「強制」「書き方指導」「評価」

書く指導には「強制」「書き方指導」「評価」
の3点が欠かせないと、中森先生は言う。

「まず生徒が書かないと指導が始まらない
ので、『強制』しても書かせます。強制す
るためには、生徒の興味を引くような題材を
選び、その上でどのように書けばよいのか、
『書き方』の提示が必要です。更に、書いた

ものをプラスに『評価』して、生徒自身に『自
分は書ける』という自信を与える。この三つ
をきちんと続けることによって、本校の生徒
でも長文が書けるようになりました」

他校と合同の小論文講座で 自信を深めた生徒たち

この指導法は、09年8月、同校で開かれた、
他校との合同開催による小論文講座でも実践さ
れた。

福井県では、数年前から学力向上事業の一環
として、県下一斉での小論文講座を実施してい
る。08年度までは大手予備校の講師を招いて開
いていたが、09年度からブロックごとの開催と
なった。

若狭ブロックでは、同校が企画・運営を担当
することになった。だが、この年から県の予算
がほとんど付かなくなり、外部講師の招聘はお
ろか、教材研究費も自前で工面しなければなら
なくなった。ただし、予算があったとしても、
以前から課題はあった。生徒の実態を知らない
外部講師による講義では、生徒に合った指導が
出来ていなかったのだ。

そこで、これらの課題の解決を図ろうと、こ
れまでの経験を生かし、外部講師に頼らず、同
校の教師が講師を務める小論文講座を行うこと
にした。09年5月に同校の教師12人による「チ

ームイースト（若狭東高校小論文指導チーム）」
を発足させ、8月までに計画を練り上げたので
ある。

講座は、生徒の希望進路に対応して、「人文・
教育系」「医療・保健系」「社会科学・学際系」「自
然科学系」「家政・生活科学系」の5分野を設
定した。1分野1〜3人が担当となり、7月か
ら教材研究を開始。レジュメは何度も修正し、
前日には模擬授業を行うなど、準備は入念に行
った。

当日は、同校以外に、敦賀^{つるが}高校、美^み方^{かた}高校、
若狭高校から計157人の生徒が参加。60分間
で小論文を書かせた後、90分間の講義を行い、
これに基づいて60分でリライトさせるといっ
流れて進めた。完成した小論文は、生徒同士で読
み合い、相互評価を行った。

他校生との交流は、同校の生徒に大きな自信
を与えたようだ。進学指導室3学年担当の東山
裕紀先生は次のように述べる。

「他校生の小論文を読んで、自分の文章は
他校の生徒と比べても遜色ないと感じた生徒
が多かったようです。中学時代に教科の成績
が悪く『自分には出来ない』と劣等感を抱き
続けてきた生徒が、自分は他校生と同等以上
の文章を書ける、考える力があると、自信を
深められたのです」

教師手作りの講座は、当の教師にとっても絶
好の学びの場となった。

「授業のシナリオを描いたり、生徒の反応を想定してのシミュレーションをしたりと、万全の準備をしましたが、前日は緊張でなかなか眠れませんでした。他校生も迎えた講座が成功したのは、教師が皆で『チーム』となつて支え合っていたからだと思います。互いに高め合い、支え合いながら準備に没頭した1か月は、私にとっても密度の濃い学びの時間になりました」(森先生)

「何度も指導案を練り直して当日に臨んだため、レジユメには自信がありました。ただ、課題文に対する自分なりの理解が深められなかったこと、時間内に小論文を完成させた生徒が少なかったこともあり、改めて自分の教材研究の未熟さを痛感しました」(東山先生)

こうした反省を踏まえ、次年度は更なる改善を図って開催する予定だ。

校務分掌が連携し「心をつなぐ指導」を目指す

09年4月から、同校の指導は新たな段階に入っている。かねてからの課題である、生徒のコミュニケーション力を

クラス経営計画

若狭東高校の普通科では、07年度の改革開始以来、教師の指導力向上にも努めている。その1つが「クラス経営計画」。クラスの目標、生徒と教師が守る約束、学校行事への取り組み方などの指導方針を明示した計画書である。計画的なクラス経営を行うため、担任が年度当初に作成する。書式は自由。学級目標、学習指導、進路指導、生徒指導など場面ごとに目標を明示する教師もいれば、「目指す生徒像」を示した上で年間指導の流れを詳細に記す教師もいる。

小・中学校ではクラス運営の年間計画を立てるのは一般的だが、高校ではそれほど多くはない。「生徒に『目標に向けて努力しよう』と言うのと同じように、担任も年間を見通したクラス経営の視点を持つことが大切です」と東山先生。年度の最初のLHRで生徒に「クラス経営計画」を配布し、年度終了時に達成度を採点させる教師もいる。あらかじめ目標やその方策を掲げることで、クラス経営に向けた決意を新たにすると共に、生徒の担任に対する信頼感を高めたいという狙いもある。



高めるための取り組みを、3年計画で始動した。その名も「HEART TO HEART」。これまでの「書かせる指導」の強化はもちろん、中学生対象のオープンキャンパスの場で3年生に語らせたり、授業で討論やプレゼンテーションの機会を積極的に設けたりと、進学指導室や教科などの校務分掌が連携して、教育活動のあらゆる場面で生徒が発信する活動を取り入れる。

改革開始から3年。大学進学率は国公立大共に向上、上場企業への就職者も増えた。だが、それ以上の大きな変化は生徒の表情に表れている。

「生徒が毎日、元気に学校に来て、その表情が明るくなっているのが、何よりうれしいですね。学校を好きな生徒が増えていっていると感じます。かつて感じていたような居心地の悪さ、肩身の狭さのようなものがなくなったのではないのでしょうか。より多くの生徒が『若狭東高校に来て良かった』と思って卒業出来るように、教師一丸となって指導に当たっていきたいと思います」

自信に満ちた生徒の笑顔こそが、教師たちを奮い立たせる原動力になるのだ。

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトをご覧ください。

2007年2月号特集学校事例「兵庫県立姫路飾西高校」など

▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)

3年生1学期の「受験生への切り替え」と自立の一步となる志望校設定

3年生1学期は生徒にとって受験生としてのスタートを切る上で重要な時期である。一方、多忙な教師にとっては、生徒の熱を冷まらずに、受験生へと効率的に切り替えさせられるかが課題になる。そこでポイントとなるのは、受験生の1年間のさまざまな取り組みの価値を教師が再確認すること、そして生徒が志望への思いと今の自分とのギャップを自分の言葉で語ることだ。

※このコーナーは、高校の先生方との会議を経て制作しています。掲載しているデータなどは、先生方が実際に活用されているものを基にしています。

取り組みのニュアンスを学年団で共有するために

図1 学年団の目線合わせのための指導フロー

ダウンロード

月	全体の動き (●=担任の動き)	共有のポイント
4月	スタディサポート(3年生1回) 志望校調査(志望校設定シート) スタディサポート結果分析検討会 面談 LHR	<ul style="list-style-type: none"> ● 学年の現状を把握し、今年度の教科指導・学年経営の基軸設定と修正 ● あるべき学習習慣と進路志望状況を個別に具体的に指導できるように ● 生徒の志望の背景を知り、年間指導に有効活用(6月の模試までに、進路について考えておくべきこと、調べることを提示するとよい) ● 志望校決定シート、スタディサポートデータを活用して具体的にアドバイスし、実践させる ● 1年間の学年目標、進路行事などを共有 ● ゴールデンウィークで遊ばせないためにも、「この時期がいかに大切か」を、入試からの逆算で考えさせる→先輩データで意識付ける
5月	ゴールデンウィーク 学習時間記録期間 学年集会	<ul style="list-style-type: none"> ● ゴールデンウィーク中とその後の1週間を学習時間記録期間とする。連休を経ても、安定して学習が続けられているかを確認 ● 4月の面談やスタディサポートの分析結果が生かされているか ● 6月、7月の模試の重要性。ここで結果を出せると、生徒は自信が持てる。 ● 部活動引退後の生活リズム切り替えの重要性
6月	LHR(志望校設定) 面談 進研模試	<ul style="list-style-type: none"> ● 進研模試前に志望校設定をさせる。4月の志望校設定検討シートを踏まえた面談時に示した「しておくべきこと」がしっかり出来ているか、志望に変化があるかなどを確認

1

指導ストーリーを軸に学年団の団結を強める

短期的な目標を明確にするために

図2 テーマ別スケジュール

ダウンロード

月	学習のテーマ	進路のテーマ	生活のテーマ	テスト・模試
高3の1学期	4月 授業に集中し、5教科にこだわろう	進路実現でのこだわりを明確にし、志望校を第3志望まで設定してみよう	部活動加入/授業中心の生活で、4月からは家庭学習をプラス1時間	上旬 校内模試 中旬 下旬
	5月 理科、社会に得意科目をつくろう	志望校について保護者と話そう	部活動非加入/苦手教科の克服を目指して、家庭学習をプラス1時間	上旬 定期テスト 中旬 下旬
	6月 教科書の応用問題で実戦力を高めよう	第1志望を絞り込もう	高校生活最後の文化祭に全力を尽くそう	上旬 校外模試 中旬 下旬

年間計画は、生徒に向けた言葉で作成することで、学年集会やLHRで教師だけではなく、生徒にも配布して活用できる

※先輩データを生かした年間計画もウェブサイトアップしています。

ダウンロード

このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。
<http://benesse.jp/berd/> →HOME>情報誌ライブラリ(高校向け)>生徒指導・進路指導ツール集

プラス α の指導

3学年教師集団としての 目標を掲げる

年度当初に行事などの共有と共に、どのような教師集団になるべきかを、目線合わせをしておきたい。「学力低下を子どものせいにはしない」「普通に見える生徒」こそを大切にしたい指導をする」「どのようなデータからも子どもの素の姿を感じられる感性を持つ」「基礎基本をきちんと徹底させる」などの目標を言語化する。年度当初に徹底し共有しておくことで、夏休み明け、推薦入試出願時期、センター試験前後といった山場にも学年団が一丸となり、ぶれない指導ができるようになるだろう。

教科担任も含めた 学年団の団結力を高める

指導フロー、テーマ別スケジュールなど指導の先を見通すための協議、共有には、教科担任の参加も重要である。カリキュラムとは別の視点で先を見通すことで、「今どのような雰囲気での授業が必要か」が見え、指導が変わることも少なくないだろう。このことによって、学年としての団結力も更に高まっていく。また、協議に当たって、前年度の3学年担当をアドバイザーとして招くことで、よりリアルな声を資料に盛り込むことができる。

新旧3年担任による 情報交換を行う

3年生の担任は、前年度の3年生担任と「進路指導上、重要な時期」「成績上昇の生徒、下降の生徒などのエピソード共有」「課題（もっとこの時期にこうしておけばよかった）」「多忙度（この時期までに〇〇しておくべき）」などについて、情報交換をしておきたい。また、2年時、担任を持っていて、3年で担当にならなかった教師からもしっかりと引き継ぎをしておくことが大切だ。指導のノウハウだけでなく、「思い」を継承することが重要だ。

活用後のフォロー

◎どのような行事が、どのような狙いで実施され、どの行事とリンクしているのかを理解することで、学年団には「生徒に積極的に仕掛ける時期」と「生徒個々の思考の成熟をじっくりと待つ時期」が明確に区別出来るようになる。受験の1年間の中で、教師から自立することも生徒に期待される成長の1つである。生徒が教師の誘導がなくても進路を考え、選ぶようになるには、教師の「手をかける時」と「手を離して待つ時」のメリハリが重要だ。生徒が受験を通して大きく成長するために、学年団は「手をかけるべきタイミングを見抜き、そこで素早くアクションが取れる集団」を目指したい。

データ活用 のねらい

進路ストーリーを可視化する

1年間の進路ストーリーを共有 ●3年生にとって、4月はリセット感を持ち、受験生としての1年間を好スタートさせる上で、非常に重要だ。だが教師は、さまざまな行事や校務が山積し、目の前のものを一つひとつこなしていくことで精一杯であるのが実情だ。慌ただし時期だからこそ、学校として設定する面談や模試、学年集会の意味とつながりを見通しておかないと、生徒のリセット感を日々の学習習慣へと確実につなげていくことができない。進路ストーリーの共有で、まず学年団の結束を図ることが必要である。

可視化して、各自の役割を明確にする ●教師の意識、指導のベクトル合わせを年度当初にどれだけ行えるかで、指導の質は大きく変わる。学年目標、目指す生徒像、方針、行事などを「点」として確認するだけでなく、生徒の変化、成長という「線」としての指導ポイントを日程表に書き込むなど目に見える形で目線合わせする。それによって、担当教師の役割が明確化し、教師間の連携が強まる。

データ活用 の流れ

教師同士の語り合いを中心に

各行事の「狙い」「リンク」を意識する ●まずは、大学入試までの計画を学年団で共有したい。指導フロー（図1）、テーマ別スケジュール（図2）などを使用すると理解しやすいだろう。特に、「各行事にどのような意義や狙いがあるのか」「各行事がどのようにリンクしているか」をベテラン教師が中心となって言語化していく。それによって「受験生の1年間を通してどのような生徒を育てるのか」が具体的にイメージ出来る。

それぞれの経験を語り合う ●指導ストーリーを協議する時間を設けて、「このような声掛けが有効」「過去にこのような事例があった」など、各教師の経験を共有する。そこでの意見を踏まえ、「この学年団ならではのストーリー」をつくる事が出来れば、更に学年団の一体感が醸成されるだろう。

4月は 学年方針の ベクトル合わせが カギ

年度当初の学年会議で、指導フロー、テーマ別スケジュールなどを学年方針のたたき台として提示（図1、2使用）

3学年団の各教師に、足りない点、深める点などを考えてもらう。（前3学年の教師にも協力してもらうとより良い（図1、2使用）

4月下旬の学年会議で、指導フロー、テーマ別スケジュールを基に協議（図1、2使用）

学年会議などで、定期的に確認し、常に先を見通した指導を意識する（図1、2使用）

2

将来像を意識した志望校設定で生徒を育てる

「生徒把握」と生徒の「気付き」のために

図3 生徒に自分を語らせる志望校設定シート ダウンロード

現在の志望先

A	大学	法	学部	法	学科
B	大学	法	学部	法律	学科
C	大学	人文	学部	人文	学科

・志望校(進路・生き方)を考える上で、優先したこと、大切にしたこと

夢と夢で終わらせざるを得ない。実現できる環境が整ったと知り得た大学が、これに経済的にも進学が可能なこと。

ここに書かれた内容をもとに、面談を行う。進路のこだわり、あるいは悩みや不安など、その生徒の今を語る上で欠かせないキーワードを面談で見つけたい

・自分はどうのように生きたいか。その上で、なぜこの志望校にしたのか

より安全で電気な道も歩こうと思いましたが、自分の心に正直に、学びたいことも、一番安心している大学で学びたいと考えた。

・どんな勉強がしたいか、どんな職業に就きたいか、どんな興味を追求したいか

法律の勉強がしたい。そして、その人々について社会のことを学びたい。法律の知識を生かせる仕事に就きたい。

・なぜその大学を選んだのか、なぜその土地で暮らそうと思ったのか

法律の勉強がしたい。理想としている大学生活がここにある。思ってから、法律に慣れる仕事に就きたい。卒業生が通っていることも魅力を感じた。

・なぜその学部・学科を選んだのか

法律の勉強がしたい。社会人として必要な考え方を身につけられる。資格の取得もできること、この学部・学科も志望した理由。

生徒の「こうありたい」という思いと、志望学部・学科の設定にズレがないかを確認する。学部・学科への思いが固まっていれば、出願時にも生徒の判断はぶれない

・志望校の特徴ある教育内容、グローバルCOE、特色GP、現代GPなど

2年次に行われる実習は、地域の問題と息を合わせて考えたい授業であり、大学からでは学びが浅い。体験で生きた学びと期待している。

・第1志望の入試科目配点

	国語	数学	英語	地歴	公民	理科	その他
センター試験	150	150	150	50			
個別学力試験	150	150	150	150		150	

※このシートに記入した内容を基に6月の面談を実施します

4月9日記入 保護者確認サイン(通研)

個に応じたデータ活用

図4 部活動中心で焦る生徒に授業の大切さを伝える卒業生データ ダウンロード

卒業生の進学先	部活動	部引退前の学習時間	部活動参加中の主な学習内容	部引退後の学習時間
地元国立大理系学部	野球部	2.5時間	授業の予習復習、弱点科目(物理、化学)の強化(学校で使っている問題集を活用して)	5.5時間
地区ブロック大文系学部	卓球部	3時間	授業の予習復習、校外模試の解き直し	5時間
旧帝大理系学部	水泳部	3.5時間	授業の予習、センター試験対応参考書(古典)	6時間
公立大文系学部	陸上部	3時間	授業の予習復習、授業で使っている問題集の演習(解き直し重視)、長文問題集(学校で使っているもの)	5.5時間

このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。
<http://benesse.jp/berd/> →HOME>情報誌ライブラリ(高校向け)>生徒指導・進路指導ツール集

今回のテーマと関連する過去のバックナンバーも併せてご活用ください！ 右のウェブサイトをご覧ください。

●2007年4月号
「受験生にするための3年生1学期の意識付け」

●2008年6月号
「受験へ向けた3年生生保護者への意識付け」

Benesse® 教育研究開発センター

<http://benesse.jp/berd/>

生きたデータの徹底活用 クリック!

HOME→情報誌ライブラリ(高校向け)→
生徒指導・進路指導ツール集でご覧ください

加工可能な資料がダウンロードできます!

ウェブサイトから
 ダウンロード!
 生徒指導・
 進路指導ツール集

プラス α の指導

志望校設定シート作成と面談をセットにする

志望校へのこだわりや志望の根拠、更に将来も自分が大切にしていきたいことなど、進路の志望に関して多面的に教師が問い掛け、それに対して生徒自身の言葉で語らせることで、生徒の志望校に対する意識が高まってくる。空欄で書けなかった設問でも、面談で問い掛けると未整理ながら自分の思いを語り始める生徒も少なくない。事前の設定シート記入と面談という2つの作業を通して、生徒の今を確認していくというイメージを持つとよいだろう。

3年生1学期中に5教科型の学習を実践させる

高2までの3教科型の学習と高3からの5教科型の学習では、生徒の日々の学習の進め方も大きく変わってくる。そこで高3になった段階で、とにかく早く5教科型を体験させてみるのが重要になってくる。部活動がまだ続いている中であっても5教科型に挑戦させてみる。たとえすぐに挫折しても、この時期に5教科型を経験しておくことが、今後に生きてくる。学習記録などで、学習の仕方、バランスをチェックし、5教科型へ移行する見通しを立てさせたい。

受験生とは何かを考えさせる

「受験生になろう!」と言われても何をすればよいか分からない生徒も多い。生徒の志望や学校の状況によって、あるべき受験生像は異なってくる。だが、土台となるのは、「3点固定」「日々の予習・授業・復習」「模試の徹底活用」などこれまで教師が繰り返し言ってきたことをしっかり徹底出来るかどうかである。まずは当たり前のことを怠りなく日々実践していくことが重要であり、それが入試本番の成果と直結することを、卒業生のデータなどで見せる。

活用後のフォロー

◎志望校設定シートに見られる生徒の進路意識状況や学習習慣の状況などは、出来る限り学年団で共有する。そこで大切なのは、目標に向かって頑張る生徒を皆で褒めることだ。学年団のさまざまな教師が生徒に合った言葉で褒めることで、生徒の達成感や自己肯定感を高め、更なる学習意欲の向上が実現する。また、ほかの生徒には、「頑張れば、先生みんなが応援してくれる」ことが伝わり、受験を学年団全体で乗り切る雰囲気づくりにもつながる。可能であれば、1学期の4月中と夏休み前に進路検討会を実施し、生徒情報の共有化を図る。若手や赴任歴の短い教師には良い勉強の場となるだろう。

データ活用のねらい

把握と気づきを実現する

教師の把握と生徒の気づきにつなげる ●この時期、担任には生徒の実態把握が急務だが、実は生徒自身にも自分の進路観を俯瞰することが求められる。そこで有効なのが進路希望調査だ。進路希望調査を実施する学校は多いが、単に志望校を書かせるのではなく、生徒の志望の成熟度を教師が把握し、そして生徒自身が気付くためのものとしてほしい。このほか、自宅学習記録など、生徒の状況把握のための調査がいろいろと実施されるが、いずれも「教師の把握と生徒の気づき」につながるものでありたい。

個に応じたデータを活用し受験への意識を高める ●3年生になり「心機一転、頑張ろうと考え、行動する生徒」「何をすれば良いか分からない生徒」など、それぞれの状態は多様だ。だからこそ、集団に向けた一斉発信の情報だけではなく、個々に応じた情報活用が求められる。過去の受験生の事例も、それを見る生徒が「自分とここが共通する」と置き換えて考えられるような見せ方が必要だ。

データ活用の流れ

今の自分と入試をつなげる

詳細に書かせることで生徒の今が見える ●生徒の進路決定状況の度合いはさまざま。そこで、単に志望校を書かせるのではなく、**図3**のように「志望設定の際に自分が大切にしていること」など、内面まで掘り下げて詳細に書かせることがポイントとなる。抽象的な設問も織り交ぜながら、生徒の生き方を聞くことで、生徒の進路観の成熟度が見えてくる。空欄になったままで書けていないところも、生徒の今を知るメッセージの1つとして注視する。

現状の改善点を具体的に確認する ●志望校を設定することで、行くべき進学先とそこに到達するための自分をシミュレーションすることが初めて可能になる。生徒の意識が入試につながった瞬間を逃さず、目標達成のために今後取るべき行動を**図4**などの先輩の事例を利用して具体的に指導したい。

生徒把握を踏まえた先輩データ活用

志望校設定シートを書かせ、進路志望状況をチェック(**図3**使用)

自宅学習記録を実施し、生徒の学習姿勢、学習の仕方、内容などをチェック

進路志望状況、学習状況から、個々の生徒の実態を把握

生徒の実情に合わせて、先輩データを加工し、面談などで活用(**図4**使用)

地域から世界へ広がる有害物質の汚染と影響を環境化学で究明

愛媛大 沿岸環境科学研究センター 田辺信介研究室

人間の活動によって排出されたダイオキシン類や水銀などの有害物質は、空気中に気化して地球を巡り、極域（北極や南極）に集積される。愛媛大・田辺信介教授の研究室では、これらの有害物質が環境や生物に及ぼす地球規模での汚染と影響について究明し、生態系をリスクから守る方途の提言を目指している。数々の常識を覆す発見をしてきた田辺教授に、研究のだいご味やこれからの研究者に求められる資質について聞いた。

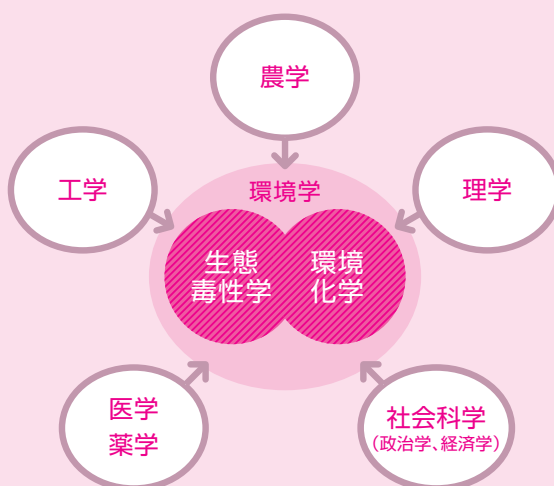
フローチャートで分かる田辺研究室

大学院生の主な出身分野

- 農学
- 理学
- 薬学
- 社会科学
- など

◎大学院生の出身学部は農学、理学を中心とし、薬学や社会科学分野にまで多岐にわたる。他大学出身の大学院生は、全体の3割程度。ベトナムやインド、ガーナ、韓国など、海外からの留学生も多い。

研究にかかわる学問分野と研究内容



◎研究室では、環境学分野の中でも特に有害物質の汚染実態を明らかにする「環境化学」と、ヒトや野生生物への影響を遺伝子レベルで探る「生態毒性学」の知見から、環境汚染の生態リスクを解明しようとしている。今後は、理系・文系にまたがる幅広い分野との境界領域が重要な研究テーマとなる。

研究成果と社会のかかわり

- 有害物質の汚染情報提供
- 生態リスクの啓蒙
- 行政への提言
- など

◎化学物質の生態汚染及び影響に関する情報提供と啓蒙、有害物質の使用規制に関する政策提言などを行う。発展途上国ではごみ処理施設の現状や有害物質を含む地下水の危険性を明らかにし、政府や国際機関へ働きかけて化学物質による健康被害の拡大防止に努める。

野心的に「世界一」を目指せ

環境学分野が求める学生像

野心的で弱音を吐かない

あきらめが悪い

気力・体力に自信がある

ずうずうしい

私は駆け出しの研究者の頃から、常に「世界一」を目指してきました。研究は新しいことを発見する作業であり、それは大なり小なり「世界一」になるということです。環境学は自然科学だけでなく社会科学すなわち一般社会や政治とかかわりを持つ学問です。時には企業や行政と論を交えます。そのため、自分の論を構築する技量や誰に反論されても折れないぶとさが必要なのです。また、勉強が出来れば良い研究が出来るわけではありません。研究の世界では知力がすべてだと思われがちですが、知力がものを言うのは「勉強」の段階まで。勉強は「先人の発見を覚えること」であるため、知力に重点が置かれますが、研究の世界では体力と気力もバランス良く備えなければ、絶対に成功しません。むしろ気力と体力が抜群なら、最後は知力の高い人を超える実績を上げることも可能です。粘り強く野心的に努力出来る若手が「世界一」の研究者になれるのです。

高校生へのメッセージ

大切にしてほしいのは恩師の存在です。私自身、学生時代に恩師と出会ったことで、その後の人生が大きく変わりました。優れた人物との出会いは研究者の人生観に大きな影響を及ぼします。ただし、「人生の師」とは意識しなければ出会えないものです。自分からそのような人物を見つける努力をして欲しいと思います。



田辺信介 教授 Tanabe Shinsuke

愛媛大沿岸環境科学研究センター教授。愛媛大大学院農学研究科農芸化学専攻修了。愛媛大農学部助手、文部省在外研究員、愛媛大農学部教授などを経て、現職。1999年日産科学賞、2005年日本環境科学会学術賞、08年北米環境毒性化学会 Educational Award 国際賞、09年日本学術振興会科学研究費補助金第一段審査貢献表彰など、受賞歴多数。グローバルCOEプログラム拠点リーダー。

研究内容

瀬戸内海から南極に地球規模で広がる汚染の実態を解明

私は、環境ホルモンの有害物質による環境の汚染、生物への蓄積や影響を地域的・地球規模で解明する研究に取り組んでいます。

しかし、元々この分野を志望していたわけではありません。学生時代は大学紛争の真ただ中で、授業はまともに受けられず、講義があっても大半の先生は教科書の棒読みで、全く興味が持てない状況でした。

ところが、立川涼先生（元高知大学長、愛媛大名誉教授）だけは違いました。留学先から帰国したばかりの先生は、当時アメリカで問題になっていた農薬汚染を題材に熱のこもった授業をされていました。日本では汚染や公害が社会問題になり始めた頃で、環境という言葉も定着していない時代でした。教科書を使わず、スライドを多用する授業スタイルもユニークでした。他の授業では出席を取ったらずくに教室を出ていきましたが、立川先生の講義だけは最前列の席で最後まで聞いていました。

大学4年生になると、立川先生の研究室に所属し、瀬戸内海の汚染について研究を始めました。汚染の実態や海洋生物に蓄積しやすい物質の動態などについて研究を進めるうちに、不可解な事象にぶつかりました。瀬戸内海に残る有害物質の量が、陸域で使われた量に比べて極めて少なかったのです。「有害物質は自然界では分解されにくい」といわれていましたから、その消失の理由を探りました。その頃、科学雑誌で「北極海の海が汚染されている」という論文を読み、気付いたのです。「有害物質の残存量が瀬戸内海で少ないのは、気流や海流によって地球規模で広がったからではないか」と。

「この仮説を自分で証明したい」という衝動に駆られ、立川先生にお願いして東京水産大（現、東京海洋大）の調査船に乗せてもらい、南極海で空気や海水の汚染を調べました。その結果、人間活動の場から遠く離れた極域の海が有害物質によって汚染されていることを明らかにできたのです。化学物質は、水温が高いと空气中に放出され、気温が低いと空から水へ溶け込む性質があります。



写真 現地で採集した土壌や生物のサンプルを特殊な分析機器を使い、分析する

産業活動によって産出された有害物質は、水温の上昇に伴ってガス化し、気流に乗って地球を巡り、最終的に発生源から遠く離れた極寒の海に集積することが分かったのです。

1988年には、もう一つ、研究人生の転機となる出来事がありました。アメリカ留学を終えて東回りで帰国する時に、人類が生産・利用した化学物質が原因と思われる野生生物の異常をたくさん目にしたので、くちばしの曲がった水鳥、奇形のイルカ、アザラシの大量死……。どれも偶然とは思えませんでした。いずれも背後に化学物質のリスクがあると考え、帰国後、野生動物の汚染研究に着手しました。

この研究で、常識を覆す発見がありました。当時、ほ乳類の体内における化学物質の蓄積量や毒性に対する感受性の生物種間差は小さいと考えられていました。ところが、私たちが調べてみると、イルカやクジラなど海を生息地とするほ乳類は、ヒトなど陸上の動物よりも、ダイオキシン類やDDTといった有害物質の残留濃度がけた違いに高いというデータが得られたのです。

私は目を疑いました。大半の化学物質は陸地で使われているのですから、汚染源近くに住む陸棲動物の方が高い濃度になると考えるのが普通です。しかし、何度、分析しても結果は同じでした。これを機に、私は海のは乳動物を対象とした研究に没頭し、海棲ほ乳類は有害物質の分解能力が著しく弱く、毒性に対する感受性が強いことを突き止めたのです。私たちの研究は、生態毒性学の専門家との共同研究によって飛躍的に前進しました。有害物質が動物に及ぼすリスクは、

研究のやりがい 新しい発見が 研究者の意欲をかき立てる

物質の量だけでは決まりません。化学物質は微量でも、その動物の感受性が強ければ重大な影響が現れます。

感受性は動物種固有の遺伝子配列や機能で決まり、それを知るためには分子生物学の知見が必要です。私たちは、生態毒性学の専門家と共同で、化学物質の毒性に対して動物がどの程度の感受性を持つのか、遺伝子レベルの研究に取り組んでいます。その結果、ヒトは肝臓の酵素で化学物質をある程度分解出来ませんが、イルカやクジラは酵素の働きが弱いために化学物質を分解出来ないことが分かりました。

研究の楽しさは、世界の常識を覆すことにあります。根拠を示して定説を覆す研究成果は、唯一無二という意味で、真に世界一なのです。しかし、世界一になれる新しいテーマを見つけることは容易ではありません。新しい発見を求めるとしたら、それは異分野との接点にあると、私は考えています。他の分野に興味を持ち、自分の分野と関連付けようとする意欲が、発見につながる。これから環境学を目指す人には、こうした姿勢が求められると思います。

用語解説

① 環境ホルモン

「内分泌攪乱化学物質」の通称。環境中の有害物質のうち、生体の成長や行動、繁殖などのホルモン作用を阻害する物質。PCB(ポリ塩化ビフェニール)やDDT(有機塩素系の殺虫剤)、ダイオキシン類などがその代表で、分解されにくく、いったん環境中に放出されると、長期間、残留する性質がある。

② ダイオキシン類

ポリ塩化ジベンゾパラジオキシンと、ポリ塩化ジベンゾフラン、コプラナPCBの総称。強い毒性を持つ。廃棄物の焼却、パルプの塩素漂白、農薬の製造工程などで非意図的に生成する。

③ DDT

有機塩素系の殺虫剤。かつては農薬や防疫目的で広く使用されていたが、発がん性や内分泌攪乱作用のあることが判明し、日本を含め、世界各国で使用禁止となった。

途上国沿岸域における環境汚染の実態を探る



染矢雅之さん
Someya Masayuki

愛媛大大学院理工学研究科
環境機能科学専攻博士後期課程3年
(大分県立佐伯鶴城高校卒業)

Q なぜ環境分析化学を学ぼうと思ったのですか

A 私が高校生の頃、バイオテクノロジーノロジーや遺伝子の研究が盛んになりました。バイオテクノロジー分野を学びたいと愛媛大農学部へ進学しましたが、3年生の時、田辺教授の授業を受けて、方向が大きく変わりました。人間が作り出した化学物質が野生生物に深刻な影響を与えていると知り、地球規模の環境問題に取り組みたいと考えたのです。

修士課程修了後、いったん化学分析の会社に就職しました。焼却施設のダイオキシン類の濃度が安全基準を上回るかどうかを、施設を所有する企業の依頼を受けて測定する仕事でした。業務を続けるうちに、企業や行政、政治がかかわる化学物質の環境問題について考えさせられ、また社会矛盾に対する考えも深まってきました。そして、私は3年間勤めた会社を退職し、田辺先生の研究室に戻ったのです。

Q 現在の研究内容を教えてください

A アジア諸国におけるダイオキシン類汚染の実態を研究しています。韓国、中国、ベトナム、カンボジア、インドなどの沿岸地域を回り、二枚貝のイガイをサンプルとしてダイオキシン類の蓄積量を調べました。これまで、アジア諸国のダイオキシン類汚染に関するデータはなく、この調査によってかなり高い濃度で汚染されていることが分かりました。加えて、臭素系ダイオキシン類の存在を初めて明らかにしました。

研究の過程では、不可解な事象に

たくさんぶつかります。いろいろな情報を総合して何とか科学的根拠を探ろうとしますが、それでもうまく説明出来ないことがよくあります。非常にもどかしく感じますが、それだけに、新たな仮説を立て証明できた時の喜びはひとしおです。

Q 高校生へのメッセージをお願いします

A 私は、高校時代、数学が苦手でした。公式の暗記が何の役に立つのか分からず、真剣に取り組めなかったのです。しかし今は、その重要性を痛感しています。例えば、ダイオキシン類の環境動態を数理モデルで説明するには、微積分の知識が必要です。私はいちいち基本式に立ち返らねばならず、高校

時代にしっかりと勉強しておけば良かったと後悔しています。

また、国際会議などで海外の研究者と交流する時には、英語でのコミュニケーション力の不足を痛感します。高校で習う英語は、論文を読んだり書いたりする時の土台になります。

日本語で論文や報告書を作成することも研究上必要です。作文を通した表現力を高めるために、国語の重要性も感じています。

社会に出た時、役に立たない教科はありません。受験に不要だからといって切り捨てるのではなく、すべてが自分の血となり肉となるという意識を持って、前向きに取り組んでほしいと思います。

私の高校時代

興味を持ったことはとことん追求

●高校時代から、ある事象について、結果だけではなく、「どうしてそうなったのか」「なぜそれが起こったのか」というところまで突き詰めて考えるのが好きでした。例えば、世界史。受験だけを考えると起きた年や事件の名称さえ覚えておけば十分であるという場合でも、その原因にまでさかのぼって理解しようと思いました。一見、遠回りに見えますが、流れの中でその事件を捉えるほうが、かえって理解も進み、効率よく頭に入ると感じていました。今振り返ると、世界史の先生の指導によることも大きかったと思います。周辺の事件にまで話が及び、自分で調べたいと思うきっかけにもなりました。

世界史の知識自体は現在の研究に関係ありませんが、原因までも突き詰める思考法は研究を進める上で必要なスキルです。幅広い教養や見識を身に付けておくことが、自分の可能性を広げると感じています。

30代教師の転

起

きる！

んでも

失敗やつまずきを転機に、授業力を高める！



「つまらない」と言われたあの日から
理想の授業への挑戦が始まった

茨城県立古河第三高校

藤田一輝先生

36歳

私が乗り越えてきたもの

「先生の授業はつまらない」



ふじた・かずき ◎教職歴14年。同校に赴任して6年目。担当教科は化学。3学年担任。
茨城県立古河第三高校 ◎全日制／普通科／共学
09年度入試では国公立大は、一橋大、筑波大、横浜国立大、茨城大、宇都宮大、埼玉大などに47人が合格。私立大は、慶應義塾大、国際基督教大、GMARCH（*）など延べ358人が合格。

「教師の言葉に素直に従うのが生徒だ」。化学の教師になった頃の私は、生徒と教師の関係をこのように考えていました。その背景にあったのは自分の中学、高校時代の経験です。特に、中学校の理科の先生は、50分間の授業をあとという間に感じさせる程の授業力の持ち主で、「楽しみながら学力が身に付く授業がしたい」と、私に教師の道を示してくれた存在でした。

ところが、現実には厳しいものでした。生徒は年齢の近い私に気軽に声をかけてきました。しかし、油断からいつの間にか友だち感覚に陥り、毅然とした態度で指導に臨めなくなってしまいました。授業も、「どうもうまくいっていない」と感じていました。教職2年目、自主的に実施した無記名アンケートで、「先生の授業はつまらない」とはつきりと書かれた文字を目にした時は、「私が教えなければ、この子は化学を好きになったかもしれないのに」と申し訳ない気持ちになりました。

改善の積み重ねで授業が変わる

生徒に授業アンケートを実施したのは、とにかく改善のヒントが欲しかったからです。定期テストの平均点も私

の受け持つクラスはいつも下位でしたから、何かを変えなければならぬのは明らかでした。

アンケートには「話の間が長すぎる」「板書が読みにくい」など、いくつか指摘がありました。翌年度の授業では、それらを意識して改めていきました。

4、5年目から、授業の雰囲気も変わっていきました。説明↓板書↓視写を繰り返すだけだった授業の中に、次第に生徒との言葉のキャッチボールが生まれてきたのです。成績でも、ほかの教師が担当するクラスとの差はほとんどなくなりました。「これで良くなる」という方法論があったわけではなく、生徒や先輩教師の指摘を受け、少しずつ授業改善を積み重ねた結果でした。

私が教えなければ、化学が好きになれたはず……

*GMARCHは学習院大 (G)、明治大 (M)、青山学院大 (A)、立教大 (R)、中央大 (C)、法政大 (H) を示す

*プロフィールは取材時 (2010年2月) のものです

実験の時間を増やしたい

30歳になる頃には、信頼関係がなければ、教師の言葉は生徒に届かないことが身に染みて分かっていました。そして、「教師が本当に自分のことを考えてくれているか」を生徒は見抜く力を持っている。そんな生徒が40人も見つめる前で授業をするのは大変なことだ。そんな覚悟も出てきました。

生徒と授業の怖さを知る一方で、もっと授業を良くしたいという思いが強まりました。例えば、覚えることの多い授業で、いかに生徒の集中力を持続させるか。10年次研修で学んだ授業法を参考に、講義だけにならないように、

生徒の様子を見ながらオリジナルプリントを配付したりしています。

しかし一番のテーマは、「もっと実験を増やしたい」ということです。私の理料の面白さを教えてくれた中学校の恩師は、毎回の授業を実験から始めていました。中学校と高校の違いはあっても、まだまだ実験を増やせるはず。本来、理論学習と実験は車の両輪のような関係なのですから。

生徒実験は年に10回くらい。演示実験はもっと行っていますが、まだまだ増やしたいです。ただ、実験を行うためには準備にその何倍もの時間が必要。さまざまな校務を任せられるようになった今、その時間をどうすれば確

保出来るのか……。恩師は朝6時には登校し、毎晩11時まで職員室にいました。生活のすべてが生徒のため、そんな人でした。ただ、私は子どもや妻との時間も大切にしたい。しかしそれは教師として逃げではないのか……。ことあるごとに自問しています。

心から納得できる授業を目指して

30代後半になり、「生徒とはこういうものだ」といった先入観がなくなつたように思います。目の前の生徒をつくり観察し、どんな授業が必要かを柔軟に考えるようになりました。

これから力を入れていきたいことは、上位層を伸ばすことで集団全体を引き上げるような指導です。そこに実

験を上手に、そしてもっとたくさん組み込みたい。入試でも実験を扱った問題が増えていますから。

「生徒が笑顔で生き生きとして、十分に理解が出来たようだ」と心から納得出来る授業は、年間約6000回の授業のうち、正直、今は10回足らずです。恩師なら、きっと5割はいくはずですから、大きな差を感じています。でも、教師を続ける以上、私も同じレベルを目指したい。毎日の限られた時間で今後何が出来なのか暗中模索ですが、もっと挑戦しなければと思います。

確かに、授業は20代の頃よりも出来るようになってきました。しかし、20代の必死さはこの先も忘れてはならない。そう、自分を奮い立たせています。

葛藤はある。しかし、挑戦し続ける覚悟もある

藤田先生 の 授業実践



Q&A

Q 生徒実験、演示実験はそれぞれどのような位置付けで行っていますか？ 取り組む際に留意していることはありますか？

A 演示実験は単元の最初に行うことが多いです。「教科書の○ページの実験である」と解説すると、生徒の興味が半減してしまうので、実験の内容が生徒の実生活とどのように結び付いているかだけを説明し、単元に対する関心を高めています。生徒実験は単元の終了時に行うことが多いです。知識がないまま実験を行うと危険ですし、授業を受けた後の方が理解が深まるように思うからです。

Q 実験で体験したことを、教科書の内容など理論の学習とスムーズに結び付けていくために、工夫していることはありますか？

A 以前、県の指導主事から教えていただいたことで、既に実践されている先生も多いと思いますが、実験のプリントの裏にそれに関連した入試問題を載せておくようにしています。実験のプリントには考察や感想を書く欄がありますが、生徒によっては早く終わってしまい時間を持て余しています。入試問題を載せておくと、そうした生徒も集中力を途切れさせることなく取り組むことが出来ます。また、3年生の課外の時間に、入試問題で扱われた実験を実際に行ってみたこともあります。

メッセージをお寄せください

◎更なる授業力の向上を目指す藤田一輝先生へメッセージをお願いします。同じ課題を抱えている同世代の先生の共感の言葉、独自の授業スタイルを確立された先輩からの応援やアドバイスなどを自由にお寄せください。編集部より、藤田先生へお届けします。

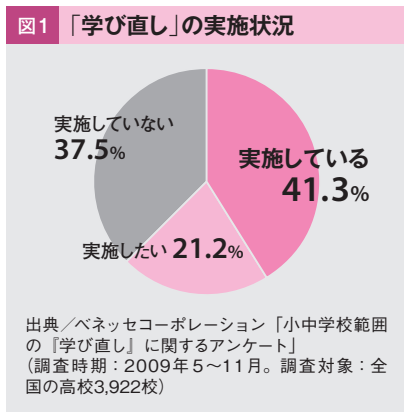
下記のe-mailアドレスにメッセージを送信ください

view21_since-1975@mail.benesse.co.jp

義務教育段階からの「学び直し」の課題と実践

— 算数・数学を中心として —

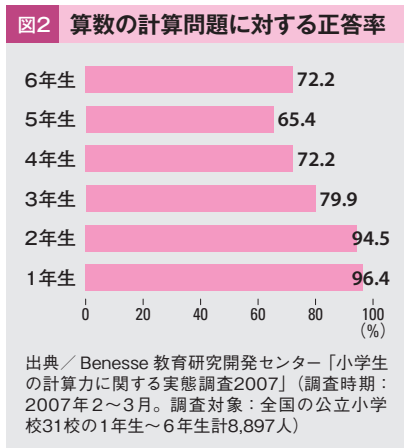
新学習指導要領に「義務教育段階での学習内容の確実な定着」が明記された。高校現場では、小・中学校での学習内容が身に付いていない生徒の状況を、まずどのように把握し、どのような対応がなされているのか。算数・数学の義務教育段階の内容の「学び直し」の指導を実践している2人の先生に聞いた。



新課程における「学び直し」の定義

2013年度から全面实施される新学習指導要領（以下、新課程*）の総則（総則等は10年度から先行実施）に、「義務教育段階での学習内容の確実な定着」のための学習機会の設置について記された。総則には三つ例示されている。

- ①義務教育段階の学習内容の定着を図るための学習機会を設ける。
- ②必修教科・科目の単位数を増加させ十分な習得を図る。
- ③（義務教育段階の学習内容の定着を目標とした）学校設定科目を開設し、必修科目の前に履修させる。



学習指導要領に義務教育段階との接続と具体的な方法まで明記されたのは、初めてのことである。

全国調査から見る算数・数学の学び直しの必要性

現在、多くの学校で義務教育段階の学習内容の「学び直し」を実施している（図1）。

小学校段階における計算問題に対する正答率から見ても、既に小学校の中学年の段階で算数に「つまづいている状況が見て取れる（図2）。「計算が出来た」という達成感を感じることがないまま、「算数・数学嫌い」になる児童・生徒が多いのが現状だ。

*数学と理科に関しては2012年度から先行実施となる

教師の授業力向上が「学び直し」成否の鍵

生徒のつまづきをいかに把握出来るか

編集部 勤務されている高校の生徒の数学に対する意識と学力の現状について教えてください。

浦崎 私の勤務校は、郡部にある1学年3クラスの小規模校で、学力的に厳しい生徒が多い学校の一つです。私はその中でも成績下位層のクラスを受け持っていて、学び直しの必要性、そして、その指

導の難しさを強く感じています。

生徒は、就職のためにも「数学をきちんと勉強しなければならぬ」と思っています。ただ、多くの生徒が小・中学校の段階でつまづいていて、小数や分数の計算すら出来ない状況です。

辻村 私の勤務校は総合学科に改編して2010年度で4年目になります。かつては学力的に厳しい生徒も多く、浦崎先生と同様に、小数や分数の計算がハードルになっていると感じていました。今は、そうした生徒はほとんどいませんが、数学への苦手意識は根深くあり、通分が含まれる分数の計算はミスをしやすいなど、学び直しが必要な生徒が少なからずいる状況です。

編集部 生徒がつまづく原因はど

こにあるのでしょうか。

辻村 小学校の中学年、高学年、そして中学校と学年が上がるにつれて、抽象的な概念が急速に増えていきます。 π や $\sqrt{\quad}$ などの記号が登場し、同じ「-（マイナス）」という記号でも、量や大きさを表すだけでなく、ベクトルのように方向を表す意味も出てきます。次々と教えられる知識を概念として整理出来ないまま授業が進み、一度でもつまずくと「自分には出来ない」と思い込んで、数学の学習から離れてしまうのです。

浦崎 生徒は「分からない」を重ね過ぎて、「自分がどこでつまづいているのか」を把握出来なくなっています。更に教師には数学で挫折した経験がほとんどないため、生徒が「どこで」「なぜ」つまづいているのかが分からない。このことが、学び直しの指導を難しくさせています。生徒が突き当たっている壁を、教師がいかに的確に把握し、生徒にも分かるようにかみ砕いて指導出来るかが、つまづきを克服するための大きなポイントになると思います。

数I・Aを理解するための素地を築く

編集部 数学の学び直しにおいて、浦崎先生はさまざまな指導法を実践しているようですが、その概要をご説明いただけますか。

浦崎 私の授業は、通常、大きく三つのパートに分かれています。冒頭の5分間に単純な正負の数などの計算問題に取り組ませる「頑張るタイム」を設け、続く20〜25分間で講義をし、残りの20〜25分間で演習に取り組ませます。

数学Iと数学Aは、掛け算と割り算、正負の数が分かっていると、ほとんどの内容を理解出来ます。ただ、本校には、「 $1-1=0$ 」と答えるなど、正負の数すら理解していない生徒が相当数います。そこで、1年生の最初の段階では、正負の数をきちんと習得させるところから始めるのです。

普通、正負の数を教える場合、横軸を使い、右方向が+、左方向が-と説明しますが、私は+5から-5までを縦に並べる「エレベーター方式」で視覚的に教えていま



辻村 博 Tsujimura Hiroshi
愛知県立南陽高校
教職歴15年。同校に赴任して9年目。数学科。



浦崎 幸士 Urasaki Kouichi
三重県立白山高校
教職歴9年。同校に赴任して3年目。数学科。

す(図3)。生徒も地下1階から4階降りたところが地上5階ではないことは分かりますから、感覚的に+-の概念を理解させることが可能です。その上で、授業冒頭の5分間を「頑張るタイム」として毎回50問、正負の数の計算練習に取り組ませ、定着を図ります。

授業は、教科書にとらわれず「生徒が理解しやすいかどうか」という観点で整理し、1時間の授業では1テーマを心掛けています。例えば、教科書には書かれていないことですが、因数分解は大きく四つ、細かく分けると七つに分類出来ます(図3)。しかし、多くの場合、この七つを整理しないまま授業を進めるため、数学が苦手な生徒は混乱してしまいます。そこで、私は7分類の一つにつき1時間、計7時間を使って因数分解の授業をしています。

編集部 通常、因数分解にかける時間は3〜4時間ですから、その倍の時間をかけて説明する必要があるということですね。

浦崎 更に、演習では「○付け法(※)」と「渦巻き法」を取り入

れています。渦巻き法は、授業の後半に取り組ませる演習問題のプリントに、本時分の演習とそれまで学習したすべての内容の演習を盛り込み、復習を何度も積み重ねさせる方法です。定期考査までを一区切りとしますので、単元が進むにつれて問題量は多くなりますが、既習事項を確実に定着させることが出来ます。

授業を組み立てる上でもう一つ意識していることは、「説明型授業」から「問題解決型授業」への転換です。例えば、二次関数では $y=2x^2$ が $y=2(x-1)^2$ になると、放物線のグラフは右に一つ移動します。これを言葉だけで説明すると1分で終わりますが、それでは生徒の学習意欲を喚起しにくく、頭にも残りません。そこで、この数式を解説する時、方眼紙に二つの数式のグラフと、そこにどのような変化が見られるのかを書かせ、その方眼紙を黒板に張りま

す。「頂点が横に動いた」「右に動いた」など意見が出そろったところで、「x軸方向に1平行移動した」という専門用語で説明をし

図3 浦崎先生の指導法

指導例1 正負の数を丁寧に

エレベーター方式	5
+は上	4
	3
-は下	2
	1
ということ	0
視覚的に示す。	-1
つまり、	-2
-1-4=-5	-3
と理解しやすくなる。	-4
	-5

指導例2 因数分解の分類

- ① 共通因数による因数分解
 - レベル1 $x^2 - 2x$
 - レベル2 $2x^2 - 4x$
 - レベル3 $16x^2 - 24x$
- ② (二乗) - (二乗) の因数分解
 - $4x^2 - 9y^2$
- ③ たすきがけによる因数分解
 - レベル1 $x^2 - 3x + 2$
 - レベル2 $2x^2 - 7x + 3$
- ④ (三乗) ± (三乗) の因数分解
 - $8x^3 + 27$

※浦崎先生の資料を基に編集部で作成

す。単に小・中学校の復習をさせるだけでは、生徒の学習意欲は上がりません。習得した学びを基に、生徒自ら授業に参加して問題に挑戦する機会を設けることで、自立的に学びに向かう姿勢も身に付けさせたいと考えています。

壁を乗り越える経験が学習意欲を喚起する

編集部 辻村先生は、生徒の学習意欲を高めることに重点を置いて指導されているそうですね。

辻村 学び直しのポイントは、「いかに生徒に自信を付けさせるか」という点にあると考えています。「小中学校の範囲が理解できず恥ずかしい」と感じている生徒の心

を「やったら出来た」という経験をきっかけとして、学びへの軌道に乗せたいと思っています。達成感を覚えさせることは、学び直しが必要な生徒には不可欠なことなのです。1年生の最初の中間考査はその達成感を体験出来る一番良い機会です。しかし、たとえその時に成果が出なくても、それから後の授業や定期考査などあらゆる機会を使って壁を乗り越えさせる工夫をすれば、生徒は自信を持って学びに向かうようになります。

また、浦崎先生が話されていた「問題解決型授業」の重要性に、私も同感です。主体的に学ぶ姿勢を身に付けさせるため、私は授業中に生徒同士が教え合う時間を設けています。生徒の説明は大抵数

*愛知教育大の志水廣教授が考案した指導方法。誤答でも合っている部分まで○をし、生徒に達成感を与えつつ、教師は生徒がどこまで理解しているのかを把握する

図4 辻村先生の「生徒を学びに向かわせるためのポイント」

◎壁を乗り越えさせる体験

1年生の最初の中間考査でいかに自信を与えられるかがポイント。そこで成果が出なくても、根気強く機会を待ち、生徒に壁を乗り越えさせる場面を設けていけば、必ず生徒の学習意欲につながる。

◎生徒同士の教え合い

主体的な学びの姿勢を身に付けさせるために、授業中に生徒同士が教え合う時間を設ける。生徒自らの言葉で伝え合うことで理解が進む場合も多い。また、人に教えることで、自身の理解不足の部分にも気付く。

◎過去の単元を反復させる

課題プリントに、前の単元の問題を繰り返し盛り込むことで、基礎・基本の確実な定着を促す。ある程度解けるようになった生徒に対しては、時間制限を設けたり、問題数を増やしたりして、より高いレベルの課題に取り組もうとする意欲を喚起する。

◎弱点を徹底的に洗い出す

定期考査や小テストなどで間違った問題は必ずやり直しをさせ、自分の弱点を認識させる。ミスをしたことよりも、「どこでミスをしたのか」を見つけようとする意識を育てることが大切。

◎数学以外の総合力も育てる

数学の問題を解くには、数式以外の読解力や推理力なども大切。新聞記事を読んだり小論文を書いたりすることで総合的な力を身に付けさせる。

学の理論としては不十分です。しかし、生徒同士の言葉で伝え合うことが、理解を促す上では重要なことです。「分からない気持ちがある」「分かる」ことが、生徒が生徒に教えることを効果的にしている要因です。教えた生徒も「友だちの役に立った」という達成感を得たり、逆に自分の理解不足に気付き、更に学びを深められたりするので、**編集部** 課題の提示の仕方にも工夫を凝らしているそうですね。

定期考査や小テストの後は、必ず間違った問題を解き直させ、自分の弱点を認識させるよう心掛けています。間違えないことよりも、自分の間違いを見付けようとする意識を育てることが大切だと

考えています(図4)。

授業力向上こそが 改革の「本丸」

編集部 新課程では、「義務教育段階での学習内容の確実な定着」の必要性について言及されました。今後、高校教育の中では、学び直しをどのように位置付ければよいとお考えですか。

辻村 新課程では学び直しの授業を学校設定科目で展開することも可能ですが、それには単位認定を必要とするなどの留意点もあります。まずは学校全体で課題を共有し、「どのような生徒を育てたいのか」という明確なビジョンを描くことが大切ではないでしょうか。

浦崎 ようやく国が本腰を入れ始めた以上、教育委員会には人的・財政的支援を、学校には組織力強化と環境整備を進めて欲しいと思います。ただ、それ以上に大切なのは「いかに教師自身の授業力を高めるか」です。「生徒のつまずきは、教師のつまずきだ」という意識で指導にあたりたいです。



辻村 教師にも生徒から学ぼうとする姿勢が必要です。どんなに良い制度や教材があっても、自分は「教科の専門家なのだから」とおごっていたら、生徒が感じている壁には気付けません。環境整備はもちろん大切ですが、教師の役目は当然ながらまず「授業」をしっかりと行うことです。授業を通じて生徒の持つ課題にいかに向けるかが、学び直しの成否を握る鍵になるのではないのでしょうか。

編集部 本日はありがとうございました。

学生が伸びる学び方

大学選択

新たな視点



今号の視点

専門性を見直し意欲が高まる 学部横断型プログラム

子どもが成長する瞬間は、学びの過程の中にある。

近年、大学では学生の成長をより促すため、学習過程を工夫した教育活動を取り入れるようになってきた。本コーナーでは、志望校選びの観点としてはまだまだ情報が少ない「大学の教育活動」に焦点をあてる。

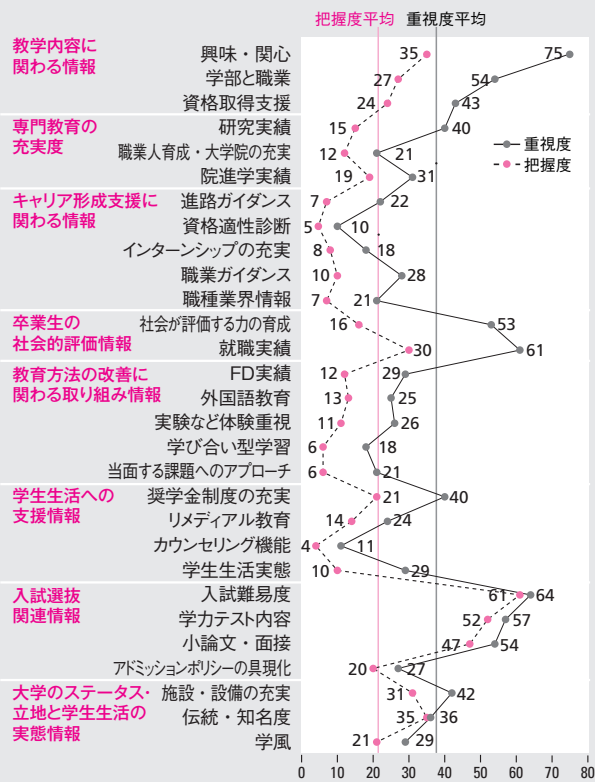
教育の「中身を見る」視点が 今後ますます重要に

ベネッセ教育研究開発センターの調査によると、進路指導において高校教師が重視するのは、大学の入試難易度、就職実績といった「入口」と「出口」、そして学部・学科の教学内容であった(図1)。一方、教育方法改善への取り組みに対する関心は相対的に低い。近年、社会からの大学教育に対する期待を背景に、学生本位の教育を追求する大学が増えている。

ところが、「入口」「出口」に比較して、「教育方法」の情報は高校現場に十分に浸透していない。「入口」「出口」「教学内容」に加えて、「どのように学生を育てているか」「学生がどう学べるのか」という「実践の具体的な中身を見る」ことも必要だろう。本連載では、大学での学生に対する教育実践の取り組みを取り上げながら、大学選択の新しい視点を探っていききたい。

第1回は、学部を横断した教育プログラムを通して、学生の視野を広げ、学ぶ意欲を喚起させる取り組みを追う。

図1 大学選択指導のために教師が重視する情報と把握度



出典 / Benesse 教育研究開発センター「進路指導・キャリア支援教育に関する高校教師の意識調査報告書 (09 年度版)」

他学部生との協働を通じて 自身の専門の意義に気付く

武蔵大
「三学部横断型ゼミナール・プロジェクト」

大学での学びの中心は、専門領域の追究にある。しかし、専門にこだわるあまり、就職時に、可能性を学生が自ら限定したり、他の価値観に興味を示さなかったりということになりかねない。こうした課題を踏まえ、武蔵大では、学生が多様な価値観に触れる機会として「三学部横断型ゼミナール・プロジェクト」を設けている。全3学部（経済・人文・社会）の学生による混合チームをつ

図2 武蔵大「三学部横断型ゼミナール・プロジェクト」の授業の進め方

- 1 企業からの課題は「CSR(*)報告書の作成」。企業担当者から会社概要の説明を受ける
 - 2 学部ごとに分かれて担当企業について徹底的に調査し、後半での「CSR報告書」の実制作に必要な方針や内容の予備調査を行う
 - 3 各学部の中間発表を受けて、三学部横断チームで「CSR報告書」の編集方針、構成、デザインなどを話し合い、実制作を行う
 - 4 課題を提供した企業に対して、実際に制作した報告書を報告する
- * corporate social responsibility。企業の社会的責任

図3 企業が求める人材像

主体性	物事に進んで取り組む	84.8%
実行力	目標を設定し行動する	81.0%
課題発見力	状況分析による課題・目的の設定	79.1%
柔軟性	意見や立場の違いを理解する	71.5%
創造力	既存の発想にとらわれず解決法を考える	67.7%

※全12項目のうち、上位5つを抜粋。数値は東証一部上場企業を対象とした調査結果
出典／経済産業省「社会人基礎力に関する緊急調査」（06年4月）

くり、企業が出した課題の解決案をチームで考え提示するという「PBL（課題解決型授業）」で進める（図2）。2009年度に文部科学省の教育GPに選定された。

プロジェクトを統括する経済学部の高橋徳行教授は、「社会では、主体性や創造力など専門知識以外のさまざまな力が求められます（図3）。しかし、専門知識さえ身に付けていれば社会に受け入れてもらえると思

授業は週1コマ、履修期間は半期。定員は3学部合計で30〜36人、前期は3年次、後期は2、3年次で履修出来る。

社会で求められる力の涵養だけでなく、専門分野の学びの深化も狙いの一つだ。「予備調査の授業では、経済学部の学生は企業活動の実態について、人文学部の学生は企業文化を探るというように、学部の専門性に応じて役割を分担します。学部の授業では意識することのなかった、社会における自分の専門の意義に気付くと同時に、知識不足を痛感させられる機会にもなります。そうした気付きや反省が、学部での学びにも良い影響を与えると考えます」と、高橋教授は期待を寄せる。

人文学部4年の田原菜々美さんは、「報告書を作る時、私はデザインにこだわり、イメージでも訴えかける表現を提案しました。こうした観点は、経済学部や社会学部の学生にはなかったようです。人文学部の独自性を示せ、大きな自信になりました」と話す。また、履修した学生が特に実感するのは、コミュニケーション力の向上だという。社会学部

意識の高い先輩の言動に 触発されて意欲が高まる

中央大
「ファカルティリンク・プログラム（FLP）」

4年の中野大樹さんは、「学部のゼミでは率先して発言しなくても議論は順調に進むことが多く、自分の意見を強く主張することはありませんでした。ところが、三学部横断型ゼミでは発言しないと議論が全く進みません。積極的に発言し、議論することが相互理解を深めるのだと実感しました。学問の場でこのような体験が出来て良かったです」と話す。

総合大学の利点を生かし、学部横断型の履修プログラムを学生に提供しているのが、中央大と埼玉大だ。

中央大の「ファカルティリンク・プログラム（FLP）」は、所属学部のカリキュラムにプラスして学ぶ、全学部共通のプログラムだ。「環境」「ジャーナリズム」「国際協力」「スポーツ・健康科学」「地域・公共マネジメント」を設定し、テーマに則した科目を履修しながら、学際的な知識の習得と問題解決能力の習得を目指す。

*プロフィールは取材時(2010年2月)のものです

各学部の開講科目のうちプログラムが指定する講義科目(20単位)と、プログラムが独自に開講する演習科目(12単位)を、2〜4年次に継続して履修し、修了時には所属学部の主専攻と同程度の専門性が身に付くように体系化した。定員は各プログラム40人。履修者は、1年次11月に実施される、エントリースシートによる書類選考と面接等で決まる。学事部教務総合事務室の松井秀晃副課長は、「03年度の開始以来、認知度は年々高まり、FLPを受講したくて本学を選んだという学生もいます」と、人気の高さを話す。

学びの中心は独自に設ける演習科目(ゼミ)だ。3年間、同じテーマのゼミを選ぶ学生もいれば、関心に合わせて違うテーマのゼミに替える学生もいる。国際協力プログラム所属の法学部4年の内村文香さんは、「2、3年生の時はODAに関心があり開発経済学のゼミを選びましたが、3年生の時にいったフィリピンでの調査で英語力不足を痛感し、4年生ではビジネス・コミュニケーションのゼミにしました」と話す。

他学部や他学年の学生と同じゼミ

で学ぶことは、大きな魅力になるようだ。内村さんは、「専門知識が豊富で意識の高い先輩と接するのは、大きな刺激になりました。自分の力不足を突き付けられ落ち込むこともありましたが、かえってやる気になりました」と話す。

商学部の中迫俊逸教授は、「学部のゼミと並行してプログラムのゼミを履修するのは大変であるが故に、履修生の意識は皆、高い。そうした先輩に間近で接する後輩もまた、高い意欲を持つようになるという理想的なサイクルが生まれています。サークルではなく学びの場で他学部の先輩との交流があり、その姿からも学びを得られるのは、FLPならではのメリットです」と評価する。

さまざまな価値観に触れ 正解は一つではないと知る

埼玉大
テーマ教育プログラム

埼玉大では、早くから副専攻プログラムや英語、情報の共通プログラムなど、全学開放型の教養教育を展開してきた。05年度には、今日的な課題や社会の在り方について学び、

視野を広げる「テーマ教育プログラム」を導入。共生社会教育研究センター長の藤林泰教授は、「今の学生は、社会の出来事には、問題集のように『正解』があると思っています。プログラムを通して、社会のさまざまな価値観や考え方を知り、自分で考える力を付けてほしいと考えました」と、その狙いを話す。

テーマは3つ。「社会と出会う」は、社会人講話やNPOでの体験学習などを通して社会の一端に触れる。「環境を知ろう」は、環境関連科目の習得、森林育成活動などの実習を通して循環型社会の実現を考える。「世界を翔ける」では、国際政治・経済、途上国問題などを学ぶ。

プログラムの指定科目の20単位以上修得が修了要件で、履修の順序などの規定はない。1〜3年次前期は科目を自由に履修し、プログラムの修了認定が欲しいという学生は、3年次後期に登録の意思表示をする。

特徴の一つは、学部横断のグループ討論や体験学習が設けられていることだ。大学院理工学研究科の坂本和彦教授は、「『環境を知ろう』では、2泊3日の合宿中に植林や発電施設

見学をしました。環境問題を、自分の問題として受け止めるきっかけになればと期待しています」と話す。

異なる学問分野に触れて視野を広げられることも、狙いの一つだ。国際開発教育研究センター長の丹呉圭一教授は、「例えば、健康問題を考える時、汚染物質であれば理学系、身体への影響であれば医学系の知識が必要だ。場合によっては、その背景として国の法律や税制、歴史や宗教まで考慮する必要があります。必要な周辺知識を学ぶことで、自身の専門の重要性に気付くと共に、他分野との連携の重要性を知るのです」

09年度には「世界を翔ける」の発展形として、国際開発の専門知識や英語力の強化を目指した特別教育プログラム「グローバル・ユース」を始めた。TOEIC600以上の学生を対象とし、定員は20人。2年次には1年間のアメリカ留学に赴く。

教養学部1年の鈴木友里さんも、留学を目指す1人だ。「高校時代から人種問題や国際問題に関心がありました。留学で英語力を磨き、広い視野を身に付けて帰国後の勉強に生かしたい」と抱負を語る。

専門性が違うからこそ
調整力が必要だと痛感



武蔵大
経済学部経営学科3年
五十嵐潤也
(栃木県立宇都宮北高校卒業)

三学部横断型ゼミでは、人の意見を尊重する姿勢を学びました。以前は、チームで取り組む課題であったとしても、自分で出来ることは全部1人でしてしまい、人に頼ることはありませんでした。私自身、それでは社会で通用しないと自覚していたので、三学部横断型ゼミでは、人の意見を尊重して柔軟に対処するように意識しました。

経済学部の学生は、ある程度ゴールを描き、効率的に物事を組み立てていきませんが、人文学部の学生は未知の可能性も探してみるというように、学部によって研究のアプローチが異なります。

そのため、意見が衝突することが度々ありました。私も最初は経済学部寄りの考えでしたが、頭を切り替え、ゼミが終わった後にも他学部の学生と少し気楽なモードで話してみたり、その声を経済学部の学生に伝えたりして、対立する意見の間に立って調整役を務めることに徹しました。その結果、全員のベクトルが合ってきて、質の高い報告書が完成し、自分の果たした役割にも自信が持てました。

主体的な学習姿勢が
自然と身に付いた



中央大
法学部政治学科2年
中西英一郎
(東京都立八王子東高校卒業)

FLPに所属する前と後では、学生生活がガラリと変わりました。法学部には司法試験や公務員試験を受ける学生が多く、個人で取り組む勉強が中心です。また、授業は、高校の授業と同じように、出された課題に答える学習が大半でした。

一方、FLPの授業では、問いを立てるところから始まります。特に、私が所属するゼミの先生は、細かく指示をしません。結果は厳しく求めます。テーマ設定も研究の進め方もすべて自分自身で考えなくてはならないので、自分で学習をマネジメントするようになりました。受け身の学習に飽き足りない人、主体的な学習姿勢を身に付けたい人にはお薦めのプログラムです。

学問の場で先輩や他学部の学生とかかわれるのが、FLPの大きな魅力です。特に、意識の高い先輩から得るものは大きく、専門知識だけではなく、学習に対する姿勢でも後輩の模範となるよう、FLPの場で自分を高めたいと思います。

NPO活動で
世界への視野が広がる



埼玉大
経済学部経営学科2年
高橋史子
(山形県立山形西高校卒業)

私は09年度の前期に「社会と出会う」の「NPOと出会う」という科目を履修しました。経済学部は座学による講義が中心で、フィールドワークをしたり、外部の方と接したりする機会はほとんどありません。視野を広げたいという思いで、テーマ教育プログラムを履修しました。

国際交流活動を行うNPOでインドやフィリピン、中国などの方々と交流し、日本語教室の講師、七夕祭りの出店や子どもの宿題の手伝いなどをしました。インターンシップを通して一番変わったのは、世界への視野が広がったことです。外国人と親しく接するうちに外国の状況や文化の違いを知り、他人事のように思っていた海外での出来事やニュースも身近に感じられるようになりました。

外国人への支援を熱心に行うNPOの人たちとの出会いも、大きな刺激になりました。NPOとの交流は今も続いています。3年生になると専門科目の履修で忙しくなりますが、出来るだけ時間を作って国際交流の活動は継続していきたいと思っています。

まとめ
大きな刺激が得られる
他学部混在の授業

複数学部の学生が集まる学習法には次のような成果が見られた。

- ◎自分の関心の範囲内で考えがちな学生に刺激を与え、すぐに正解を求める意識に揺さぶりをかけられる。
- ◎一つのテーマでもいろいろなアプローチがあり、解決策もさまざまだと気付くことが出来る。
- ◎自分の専門知識や能力を相対的に把握出来、それを基に学びの目標を具体的に想定しやすくなる。

同様の教育手法として、「副専攻」等の呼び方で他学部科目を積極的に履修させる大学もある。専門分野以外にも多様に学べる仕組みや、自分を相対的にとらえさせる仕組みの有無も、大学選択の視点の一つとなるだろう。

ご意見・ご感想をお寄せください

◎今回の内容に関するご感想やご意見、今後取り上げてほしいテーマなど、編集部にお寄せください。
e-mail: view21_since-1975@mail.benesse.co.jp

*プロフィールは取材時(2010年2月)のものです

府県の枠を超えて連携し 「学校力」を高め合う

「4校進路指導情報交換連絡会」

近畿地区の公立高校の進路指導部長が集まり、
2009年に「4校進路指導情報交換連絡会」が発足した。

参加校は、滋賀県立膳所高校、京都市立堀川高校、奈良県立奈良高校、兵庫県立姫路西高校。
10年2月に行われた3回目の会合では、初めて4校の校長もこの会議に出席し、
進路指導部長の議論の場に同席すると共に、校長同士の意見交換も行った。

進路指導部長の会合に 4校の校長が初めて同席

「4校進路指導情報交換連絡会」は、進路指導に関するさまざまな会合で、滋賀県立膳所高校、京都市立堀川高校、奈良県立奈良高校、兵庫県立姫路西高校4校の進路指導部長が顔を合わせるうちに、「公立高校として新しい教育の理念を具現化する学校づくりを目指して、情報を交換し、共に協力していきたい」という思いで、2009年2月に始まった。

1回目は膳所高校で行い、会場を各校で持ち回りにし、年に2回開催することなど運営についても話し合った。2回目は堀川高校を会場に、授業見学を行った。2回の連絡会を通して、各校の課題や取り組みの内容などを共有すると共に、進路指導の進め方について熱い議論を交わした。

3回目の今回は姫路西高校で開催し、初めて4校の校長すべてがこの会議に同席した。それぞれの校長が他校の進路指導部長の語る課題や取り組みを聞くことで、各

校の教育内容の改善や制度面での課題解決に向けてのヒントを得られるのではないかと考えたからである。

連絡会は、まず進路指導部長が自校の課題を報告し、質疑応答が行われた。「教育理念や指導法の継承の難しさ」「授業力の向上」「学年団や教科間の連携の必要性」などが、主なテーマとして話し合われた。

そのあと、今回4校の校長が初めて顔を合わせたこともあり、それぞれの校長の教育に対する思いや学校経営についての考え方、またそれを実現するための手立てなどについて話し合った。次ページから、その内容を紹介する。

図 参加校の位置



連携を通して思いや取り組みを 吸収し合い、「学校力」を高めたい

各校が考えている
教育の在り方について

河原 教育の改善は、つまるところ授業改善にあると考えますが、その前に高校教育として、「人として生きるということが何か」を生徒たちに伝えることが重要だと考えます。人生を生きるということの充実感を味わうこと、つまり自己実現と人間形成にどうかかわるかです。自己実現は「なりたい自分になる」こと、人間形成は「大きな人間になる」とことです。そのためには生徒にどのような力を身に付けさせればよいのか。私は二つあると考えています。一つは「問題解決能力」、二つには「共通できる力」です。自分で問題解決をし、しっかりと意見を以て発信すると共に、誰とでも共同して仕事ができることが、これからの時代には大切になると考えます。つまり、

主体性と社会性の両方を持った人を育てるということです。

それ以外にもう一つ、感性つまり「心」を育てることです。高齢化が進む中、介護や看護がますます重要な時代になってきます。そのような中では、相手の表情を読み取り、相手を思う丁寧な言葉掛けと、しっかりとしたコミュニケーションが図れる専門性が大切だと考えます。教師もまた生徒の表情や心を読み取り、生徒とのやり取りを大切にしながら人と人とのつながりを育てる教育を目指さなければならぬと考えます。

荒瀬 高校教育において大切なものは、「知らないものに対する関心」や「発信された情報や言葉を受けとめようと努力する心」だと思えます。入学時にはそうした力を持つ生徒ばかりではありませんから、本校では「問題を発見する力の重要性」を繰り返し伝えていきます。気付きを



滋賀県立膳所高校校長
河原 恵
Kawahara Satoshi



京都市立堀川高校校長
荒瀬克己
Arase Katsumi

課題に設定し、解決に向けて段取りを組む。この過程こそが、豊かな「心」を育てると考えます。

ここで重要なのは、コミュニケーション力です。課題や段取りを他者に伝えるための言語力と、他人と一緒に物事を進めるコミットメント（かわり合い）力が必要になります。



奈良県立奈良高校校長
辻 寛司
Tsuji Hiroshi



兵庫県立姫路西高校校長
中杉隆夫
Nakasugi Takao

す。この力を育てる場として、授業があると考えます。教師とのやり取りはもちろん、例えば、東京大や京都大のようなメッセージ性のある入試問題を解くこと自体、相手から情報を受け取り自分で考える訓練になるのです。

このような取り組みを通して、「自

*プロフィールは取材時(2010年2月)のものです

立する18歳」を育てることが学校の最高目標です。自分で生きる力を育むということです。10年後に彼らが親になった時、その次の世代すなわち彼らの子どもの世代を育てる人間を育てるといふ自覚を持って、教師は生徒の指導に当たらなければならぬと考えています。

辻 私はコミュニケーションの基本は『挨拶』だと考えています。「心を開いて相手に迫る」、これが『挨拶』の語義です。生徒には、折に触れ積極的な挨拶を呼び掛けています。私の前任校は進路多様校で、心を裸にして生徒とぶつかり合うと、教師と生徒というそれぞれの立場を超えた人間関係が築けるような学校でした。その学校の生徒からは、「しっかりと生きる力」を感じました。現任校の生徒は、勉強にも学校行事にも、そして部活動にも一生懸命に取り組めます。しかし、「社会をしたたかに生きていけるのか」と問われれば、疑問に感じます。

ある調査を見ると、志望校選びの際に「興味のある学問分野」で選んだ学生は約65%いましたが、同時に入試難易度や自宅通学圏内という理

由で選んだ割合も高いというデータがありました。志望校という将来を決める重要事項を安易に選ぶ生徒が、厳しい社会を生き抜いていけるのかと疑問を抱かずにはいられません。本校の生徒には、きちんとした挨拶と良い意味でのしたたかさを身に付けさせたいと考えています。

中杉 私は「心や命の大切さ」を前提にし、そこから教育を考えるべきだと思っています。そのことを踏まえ、校長自身が自分の言葉で学校の進むべき方向をきちんと職員に示すことが大切だと考えます。教育の場で生徒と直接向き合うのは先生方です。学校目標を共有し、職員のモチベーションが高まるよう支援していくのが、我々校長の仕事だと思ふのです。

私は、教師にとって最も重要なのは授業力だと考えています。そのためには、「専門性」に加えて人間力の向上が絶対条件です。単に教科書の知識を教えるというのではなく、生徒の知的好奇心を駆り立てるような授業であり、その言葉に耳を傾けたいくなるような人間的な魅力であり、生徒一人ひとりに向き合い生き

方を語る姿勢も含まれるでしょう。それらすべてがあつてこそ、生徒は教師を信頼するのではないでしょう。そして、生徒の信頼を得られれば、保護者の満足度も高まり、地域の評価にもつながると思います。

各校が目指す教育を進めるには どのような手立てが必要か

中杉 姫路西高校では、昨年度の1年間をかけて、教頭と私とで先生方の授業を見て回りました。独自の「授業観察シート」を作り、授業の展開や板書の仕方などの細目評価と授業の総合評価に加え、一人ひとりの先生方の授業力向上にむけたポイントを書き込み、その日のうちにフィードバックするよう心がけました。次第に先生方の方から感想を聞きに来るようになり、授業の改善だけでなく教師の意識向上にも効果があつたように思います。

授業観察のきっかけは、学校評価に関する調査の「分かる授業」の質問で、生徒と教師間で評価が食い違っていたからでした。熱心な先生が多いのになぜかと考えた結果、「分かる授業」を組織化することが学校

全体の力を高めると思つたのです。

荒瀬 私学や国立大付属の学校の中には、会議もなく、指導の仕方も統一されていないが結果を出している学校があると聞いています。一人ひとりの教員の持っている力が大きいからであると思います。しかし私たち公立高校は必ずしもそうはいきません。そこで私は職員会議で「私も含め、我々一人ひとりの力はちっぽけなものだから、チームワークが重要だ」とよく話します。個々の教師だけで何がができるわけではなく、皆が力を合わせてこそ、更に大きな成果が生まれるからです。ですから、例えば、授業評価では「良かった点は必ず良かったと言いました。改善すべき点は次に生かせるようにはつきり伝えましょう」と話しています。授業評価はあくまでも仕事の評価であり、その人の人格を評価するものではないからです。

堀川高校の最高目標は「自立する18歳を育てる」ことです。目標達成のために、授業や生徒会、学校行事などをどのように連携させていくかを検証しながら授業力を高めていくと考えています。この役割を担う

校務分掌として「研究開発部」を設けました。ただ、教師には一人ひとり自分なりの教育観があり、更に人事異動という制度的な壁もあって、教師同士をつなぐためには、さまざまな工夫や取り組みが必要です。

辻 公立校が避けて通れない人事異動による課題を少しでも解消しようと、奈良高校では二つの取り組みをしています。

一つは、教師の学校運営への参画意識を高める取り組みです。私は本校に赴任してすぐ、「SMA P (School Management Appraisal Plan)」というシステムをつくりました。「学校経営評価・計画」という意味で、学校教育活動全般について、目標と具体的方策を校長に提示させ、取り組みと成果を年度末に自己評価させます。また、担当の校務分掌や教科等の活動については、「自己申告シート」で目標から自己評価までを進行管理することにより、自分が取り組みたいことをどんどん提案し、実践できるようにしました。管理職だけでなく、教師が皆、学校経営への参画意識を持つことが、授業力を高めようとする意識にもつな

がると考えたからです。

もう一つは、奈良県教育委員会の事業である国立や私立校との人事交流です。08年度は奈良女子大学附属中等教育学校と、09年度は東大寺学園高校と、互いに教師を1人ずつ派遣し合い、教鞭を執ってもらいました。国立や私立校ならではのノウハウを吸収してきたことで、学校全体に良い刺激をもたらしています。

河原 本校の生徒の中で自己実現を果たし、希望校へ進学して行った生徒には三つの共通した特徴があります。その一つは、部活動に力を入れていることです。二つめは塾へは行っていないということ。特に、1、2年生の時はほとんど行っていないです。そして三つめは、親が自分のやりたいことをやらせてくれたと言います。

部活動は、創意工夫を学ぶ場です。課題研究に匹敵する学びを提供してくれます。学園祭などの自主活動



もそうですが、生徒はこれらの取り組みを通して問題解決能力と共同できる力を身に付けます。塾も有効に働く場面はあると思いますが、どうしても受け身の学習になり、また先生や仲間との交流を通して学ぶという観点はやや希薄になると考えま

す。孤立した学習に陥るかもしれません。学習は意欲を持って取り組まなければなりません。また「受験は団体戦」と生徒は言います。学習においても主体性と社会性を育てることが大切であると考えます。生徒たちの親が彼らにやりたいことをやらせているのも、学習や部活動、自主活動などに意欲的に取り組むことが、学びにとって最も大切だということを知っているからだと思います。

中杉 先生方の努力にばかり頼ってはいられません。管理職として、教師が働きやすい環境を整えるべきです。その意味でも、協働できる組織を管理職がつくり上げることは、大事だと思えます。勤務条件を整備し、教師に対する制度的な支援も充実させる必要があると思います。そのためには、教育委員会との連携が不可欠です。学校が小さな枠にとらわれず、複眼的な視点をもって共に競い合い、共に成長する時代でなくてはならないと思います。

その意味で、今後もこの「連絡会」を通してお互いの先進的な取り組みを吸収し合い、学校の力を高めていければうれしく思います。

質的な改革に向けての土台づくりが必要

新課程では、量的な改革ではなく、質的な改革がより求められると思う。それに対応するためには、現行課程の開始から今までの取り組みを振り返るとともに、「変わってきたもの」「変わらなかったもの」「変われなかったもの」を見極める必要がある。2月号の「特集」で紹介された2校のように、学校の「基礎体力」ともいえる、実践を支える学校の土台づくりを、改めてじっくり考える必要があると感じた。

〔埼玉県立不動岡高校・久保昌昌〕

新課程を機にもう一回り脱皮を図る

現行課程に対する振り返りに積み残しがある状況で、新課程の対応に移行すると、教師間の足並みがなかなかそろわない。新課程を受けてより良い学校教育課程をつくるためには、管理職のリーダーシップとともに、新しい学校教育課程を作成する委員会を設け、一定の権限を持たせてもらいたいと考えている。そうしないと、現行課程の反省を生かした思い切った学校教育課程の改定はなかなか出来ないと感じている。新課程を機に、是非、もう一回り脱皮したいと考えている。

〔三重県・匿名希望〕

いかに「帰属意識」「ぎずな」を感じさせるか

生徒の学習意欲・態度について課題意識を持っていたが、2月号「指導変革の軌跡」から、生徒が学べる環境をいかに設定するかが重要だと感じた。山形県立鶴岡南高校や名城大学附属高校の取り組みの根底には、生徒にとって「帰属意識」や「ぎずな」が何よりも大事であると

読者のページ

VIEW'S SQUARE

Volume 1

教育最前線からのホットな話題を紹介します

いう事実があると思った。現在、生徒がよく「受け身がちだ」といわれる中、人的なつながりを形成するための教師の役割は大きい。

〔北海道・匿名希望〕

「学び直し」の内容、身に付けるべき力の発信に期待

2月号「VIEW'S REPORT」で紹介された「学び直し」は、新課程の大きな目玉であり、多くの学校において必要なことである。そのため、英語だけでなく、各教科の学び直しについて、更には高校生が身に付けるべき普遍的な力についても、是非メッセージを発信し続けてほしい。

〔三重県立津高校・鈴木達哉〕

情報不足の壁を乗り越える、学校間連携に刺激

2月号「地方公立高校の挑戦」の熊本県八校連合進学連絡会は刺激的だった。地方では上位の進学校以外は、進路指導の情報が常に不足している。そうした中で、学校の枠を超えて40年間も継続して「合同学習会」などに、取り組むことは意義深い。また、教師が他校や生徒から刺激を受け、常に新しい視点で指導に当たることは大切だと改めて思った。

〔静岡県・匿名希望〕

教師川柳

校門をくぐる笑顔が つなぐ縁

兵庫県・匿名希望

Benesse教育研究開発センター
ウェブサイトを是非ご活用ください

◎情報誌ライブラリ

「VIEW21」小学版・中学版・高校版のバックナンバーが無料でご覧いただけます。

◎調査研究データ

独自の調査・研究データを自由にご覧いただけます。注目の最新調査も随時アップ中!
「学校外教育活動に関する調査」
「都立専門高校の生徒の学習と進路に関する調査」
「第2回子ども生活実態基本調査」

キーワードや学校名での検索も可能! また、「生きたデータの徹底活用」コーナーでは、便利な指導ツールがダウンロード出来ます。

<http://benesse.jp/berd/>



編集後記

私事ですが、息子が今春、高校に進学しました。中2までほとんど勉強をしなかった彼が、3年生になった途端、人が変わったように勉強を始まりました。学力が伸びたこと以上に私が驚いたのは、今の成績で入れる高校ではなく、難しい高校にあえて挑戦した姿勢です。学力が伸びたという達成感が、挑戦する気持ちを生み出したのかもしれませんが、「入試」が子どもを成長させる貴重な機会となっていることを実感した出来事でした。(小泉)

VIEW21 4月号 Vol.1

2010年4月8日発行

発行人 新井健一
編集人 原 茂
発行所 (株)ベネッセコーポレーション Benesse教育研究開発センター
印刷製本 大日本印刷(株)
編集協力 (有)ベンダコ
執筆協力 中丸満、山口慎治
撮影協力 川上一生、谷口哲、松田祐樹、松原誠、ヤマグチイキ

VIEW21編集部
〒163-1422 東京都新宿区西新宿3-20-2 東京オペラシティタワー22階
電話 03-5371-1238

©Benesse Corporation 2010

VIEW21

2010
June
6月
Volume 2

次号は
6月8日発行(予定)
「VIEW21」高校版は
年6回の発行です